

二和書門

類

消印
四一
二六

號

消印

一五
四

函

消印
一
四

架

一
冊



Columbia University
in the City of New York

THE LIBRARIES



NON-CIRCULATING

JAPANESE COLLECTION

傳

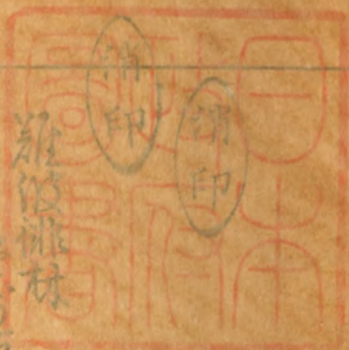
文
學
叢
書



繪
入
西
鶴
お
き
い
や
げ

井原西鶴著

全



難波惟村

松島將為彦

辭世 人なるましまの宛物は
あまのあまのりふ

あしや

浮世の月を色しよけり 末二子

元禄六年八月十日 云十二才



松島將為彦

~~918.62~~
Ib143

第六十三號

PL
794
E2

Giff. R. Lane
5-19-55



雜波洲林

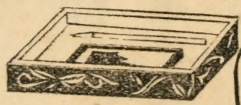
松其行西齋

解世 人る五十歳乃究物世也

歳よあままりるふ
よあしでや

浮世の月丸るよけり 末二季

元禄六年八月十日五十二才





世界の偽うそかたまつてひとつの美遊びゆうとなれり。是をおもふに眞言まことをあたりに揚屋あびやに一日は暮くらしがたし。女郎ぢやうらうはなひ事をいへるを商賣しやうばい男は金銀きんぎんを費ついでなから氣のつきぬるのざりごと。太靴たいがはつくりたそけ。やりてはまはい顔かほ禿かむろは眠ねまらぬふり。宿やどのかゝは無理むり笑わらひ。のこする女は間ぬけの返事へんじ。祖母そぼも腰こしぬけ役に酒さけの横目よこめ。亭主ていしゆは客きやくの内證ないしやうを見立けるが第一。それくゝに世を渡る業わざおかし。去程さつじやうお女郎ぢやうらう買かいさんでトめの緒むすトめさけながら此里やめたるは獨ひらもなし。手が見へて是非せひなく身を隠かくせる人其かぎりなき中にも凡およそ萬人のこれる色道のうはもりなれ

井原西鶴

大坂の人初の名は鶴永薙髮して西鶴と云後西鵬と改め晩年復西鶴に復名す松壽軒と號せり西山宗因の門人にして檀林派の俳人なり嘗て延寶年間住吉の社頭に於て一日二萬三千句を吐てより稱して二萬翁と云又戯文に妙を得たり今其著す所の書中多く世に知らるゝものは大矢數 後大矢數 西鶴五百韻 兩吟千句 博多百合 胸ほね 杉やき 石ぐるま 六日飛脚 一代女 五人女 一代男 二代男 三代男 男色大かゝ見 武道傳來記 櫻隱秘事 永代藏 武家ぎり物 語 ひがんざくら 文反古 西鶴はなし 西鶴をきみやげ 西鶴織留 胸算用 名殘文 一目玉鉾 難波大鑑一名昔の京 松壽遺言 獨こと 武家字引 西鶴俗つれゝ 等あり

元錄六年癸酉八月十日歿行年五十二歳浪花八丁目寺町誓願寺に葬る牌面には仙皓西鶴門人鶴平園水建之とあり

る行末ゆくすゑあつめて此外になし是を大全とせ

難波

西

鶴

西鶴をきこやけ

卷之一

大釜おほかまのぬきのま残し古金屋ふるかねか寢覺ねざめ

つらき物傘からかさあしの雨情あめなさけのふぢ崎さきが待夜水まつよの袖そでにかゝる迷惑めいわく

たがひに裸物語夢はだかものごとゆめの明方あけかたの風呂敷ふうろしき

世よの外聞ぐわいぶんつゝむ風呂敷ふうろしきに替帷子かへかたびらに夏なつは殊更ことさら供ともの者ものつれずして自由成じゆうなり

がたし昔むかしの定さだまつて柳やなぎこりに物ものを入いち鼓つづみのしらべのふるきにてからげ

是これを持もせけるに、それの葬禮そうらいの時ときか、公事人くじびとの供ともなり、近年きんねんの大だい臣じんの小こ島しま

染ぞめの兩面りょうめんまたはべんからの大嶋おほしまのふるしきにあつき時とき分ぶんも暮くれがたの

用意よういして、單物ひともの拾羽織あはせばかりを入いさせ、利根りねなる小者こものつれたるの古金ふるかね買かひに見みせ

ても三百貫目さんひゃくくわんめより内の身体しんたいにはあらず、爰よに難波津なまはつの横堀川よこぼりがわのほとり

に姫酒いんしゆのふたつに身みを分わけもあふ、胸むねはけふりの毎日まいにち鹽屋しほやのふじ崎さきとい

ふ美君びくんにこがれ、銀かねである分里わけさとの女おんなながら、後あとは勤外つとめにあし、此男こゝろより誰たれ

にかはと、黒髮くろかみの半なかきりて、世間せけんにこれを隠かくさすいとしさに此こゝろすがたと、



此全部五冊の書は先師の書捨置れける反古の中より出たるを書林何
がしせちに乞てあがきかたみにもやといへるに跡はきせぬとよめ
るもあはれにおもひやられてかれにあとふるものあり

難波徘徊西鶴菴

追善發句

團 水

月に盡ぬ世かたりや二万三千句

如 貞

念佛さく道さへ秋はあはれあり

幸 方

秋の日の道の記作れ死出の旅

万 海

世の露や筆の命の置所

信 徳

残いたかへんはつる月を筆の隈

言 水

泣や此襟しるひの折れす秋の風

才 磨

力なや松もはなるゝ蔦かつら

團 水

名に立たつとしの十九の花の咲さくこる此里このさとの色いろも香かもひとりしてしつたが
 は、すこしの悪にくひ程ほどあれども、いかにしても外の女郎おんなのゐるまじき事は、
 世よにある客きやくを見捨みすて揚屋あげやのゐどを聞きこにさへびくくして、春はるの夜よのひと
 つ着物きるもの袖そでの嵐あらしをいとふに、因果いんぐわはふる雨あめあなしくやどりの軒下のきしたも人の
 灯挑ちやうちんうるさく、此まへ取出との時分じぶん家買いてとらせたる太鼓たいこが方はへはしり
 込聞こみきしる聲こゑかすかに傘からかさ一本いっぴんかせといへば、女房にやうぼうか下女げじよにいひ付つて編笠あみがさ
 ならばとさるといふ、さても足もとを見立みだたる返事へんじする木履あしたかせとい
 ふからば日和ひよりのよい時御出ときみであされと申まをべし、さりとは物ものいらすめ、米
 の百目ひゃくめする時娘ときむめを八坂やさかへやる談合だんがう、廿五日にじふごにち様の名號みやうがうまで質しちに置後世おきこうせを
 取といづす時も、金子きんす十兩じゆらうの合力かりりよく前後ぜんごやつたる物を勘定かんぢやうすれば、家の時ときよ
 り此こゝかた三貫さんくわん七百目しちひゃくめ、小判こばん四十七兩しじふしちらう、米十八石いそはちじふはちいし、着物きもの羽織はねおり廿一にじふいち其外そのほかちよこ
 く心付こゝろづせし事留帳とめぢやうにはつけず覺おぼがたし是こゝを忘わすれて今度こんど唐笠からかさ一本いっぴんか
 してくれぬ、さりとはむとさしかたあり、是こゝをおもふに女郎おんなほどまこ





とあるものいなしいひかひせし事をたがへずして身を忍び命にかけ
て、一夜もあわれをとひきぐさめん事をし、外のさりと成事更にかわ
ゆくなりて、とかくあはぬがあれが爲とて雨に身をほそめて氣のつき
る軒づたひ、やうく宿に歸れば町の年寄ども念佛講の歸りと見へし
が、我等が門に立どまりて、主が聞居るともえらず、いづれ此家貳拾四貫
目には買徳なり、此格子取てもて、錢見世か、らうそくを出しうらの長藏
を小借屋に直し、かど引まはしてれもてのぶん、七分楚の算用にして
一箇月に百九十目づ、おさまれば、是ぞよき隠居やしきと、賣もせぬ先
に人の家のさし圖をする、無念ながら是非もなし、聞ほど堪忍ならね
ど、家質の連判頼みをけ、世上ほど自由にならぬ物なしと、男泣すれど、
万事は歸らぬむかしとおもふに、筋むかへの兩替屋の親仁のいへる、
親の庭好して植をかれし蘇鉄は、今に有かといへば、それいつの事、
て賣家の覺悟して、岩組までひとつも以前の形はなし、あんを仕果世に



の食悦しよくたつさすべしと、其言葉ことばも是非せひに酒のまを飲のみする所ところで、徳利とくり手樽てだるをさがせ
ども、いかなく、一滴てきもあかりし、小半こな買かべき錢ぜにもなく、此こゝ戈覺さいかく晝ひるさへな
らぬに、夜よるの事ことなればましてや分別ぶんべつが出いざりしが大庭だいていに十七じちならべて
只ただひとつ賣殘うりのかませし大釜おほいけ引ぬき、幸さいひ横町よこまちお古金屋ふるかねやのあるこそ仕合しああれ
たゝきおこして錢ぜにの俄ふはかに入いり細さいをかたり、つゝふしの直ねにして賣うにまけ
てやれば、錢ぜにわたしさまに、夜中よるちゆうに釜かまの何なにとも合點あつてんはゆかねども、よもや
是こゝばかりを盗ぬすでいござるまいといふ、神しんぞ口くちをしけれども、斷ことわり申まをて錢ぜにを
請取うけとり、やう／＼外聞ぐわいぶんを酒さけにつゝみて、此こゝ醉よめのあまりに明日あすはこよひの憂うれ
晴はるしに道頓堀みちとんぼりに出いで、中の太夫本ちゆうたふほんにして是こゝの亭主ていしゆ振舞ちんまひといふ、かたじけ
なしと約束やくそくかためて別れ、その明あけの目めいよ／＼御出ごいの使追付つかいおつお跡あとより
と、物のいらぬ事をれば、男おとこつくりすまして、夜前やぜん着物きものしはのばして、樺染かへぞめ
の平帶ひらおび長柄なががつかのひとつざし、かどたをさぬ大鶴屋おほいづるやが扇あふぎ見た所ところに今いまも大臣だいじん
あかり、けふ一日いちにちのやどひ草履取くさりとりに奥嶋おくしまの風呂敷ふろしきかたげさせしが、此こゝうち

またと有べきか、既にありさまの聲に成筈を、首尾せいでお仕合、わたく
 しの西隣にも親懸り、若い子供の風うへに置事もいやと、鼻に、しりよせ
 て物悪そふにいへり、たのれ後から、ふみたほしてもとおもへと、扱も世
 間は思案する程むつかしく、ひそかに戸をたゞけ、五十あまりの下女
 まうりいでよひほどにてお歸あれかし、八つの鐘聞てからも、しりよの
 事といふ聲ばかりして暮がりなり、火が消たかといへば、油がないとい
 ふ、それ程の才覺があらぬかと、火うち箱さが玄て、茶の下へ焼付け、その
 ひかりのうち二階へあがり、古き長持をこぼちて、夜もすがらは是を焚
 火して、ひとり文などよみながら、宵の袖をあぶるうちに、門を遠慮もな
 くて、けば、寝た顔も成がたく、誰といへば、色友達四五人、むりやりに、は
 しり入さむき夜の庭火亭主が物好どふもいへぬと、これらも傘をしの
 濡れ身をほして、何も馳走はいらぬぞ、酒はひとつのませといふ、つね／＼
 せいを申て何時きりとも御出あそばせ、内にさし合ひなし、のぞみ次第

ばこ盆ぼんの塵ちりのはらへど裸はだかで飛とびまはるを見て、是は氣根きこんつよしといへば、只今大酒おほいさけいたしましたといへど、上氣じやうきをして、旦那だんなも此れ小袖おそでの濡ぬれりとふしぎを立るはしめをかたりて、是を日當ひあたりへほせといふ、大臣だいじんも丸まるだかにあつて、いづれけふはあたゝかか日ひじやど、椽えんが立ならび齒はをくひしめて語り、我等われらはけふにかぎつて着替きかへもたせてまいらさうだ、其方がいつぞやのぐんない島しまの着物きものすこしの程借ほどかせといへば、我はだか何をうくしまゑよ、只ひとつの郡内ぐんない、ばかり洗あらはせまして、とありへくけにまいりし内、此仕合しあはせどかたる、大臣横手とこてを打て扱さてもことのかげたる内證ないしやうかな、近日着物はをり拙者しづかはづむてござる、けふは宿しゆくに首尾しゆびあしければ、取とにもやられずと、ふたり裸はだかで待まちうちの身振みぶりさまくれかしく、やうく西日にしひになつて、ほしたる着物きものひあがりて大臣だいじんこれをめせば、吉太郎仕立きちたろうしだて着物も出来できて二人ともに常つねの姿すがたとなつて踊出おどりだて、待兼まちかみる振舞ふるまいのかたにゆけば、膳ぜんはしまふて、酒さけのねもしろき所へ立出たいやといはれぬ人に留

へ其名染込そめまきのふれんたゝみ入人目かへざるに替着物かへざるとみるらんと我心のは
づかしく、眞齋橋筋しんさいばしすじに歩あゆみを南へいそげは、芝居しばいのはての人立たてに、小間物屋
の男がうち水みづにゆきかゝり、腰こしから下へ、ひとしぼりに成なて、着替かへなき身
のかぢしく、心腹こゝろはら立て眼色がんしよくかゝれば、あるじはしり出だ段々だんだん、御尤もつともせんばん千万せんじに存
たてまつる、此男こゝのこめ大和おほなより二三日ふたみ跡あとに、爰許あゝもとへまいり、つちけのはなれ
ぬ者ものかれば、せひに御堪忍かんにんと亭主ていしゆけつかう成なる一言ひとことに、ねだるべき力ちからなく、
侍衆さむらいしゆにかけぬやうにしやれと、いひ捨て通すてれば、是へ御腰こしをかけられ御
着物きものめしかへらるべし、さあゝ座敷ざしきへといふ程ほど、きのどくくるしから
ぬとて、濡ぬれながら三津寺みつでら八まんはちまんのまへに行ゆき、此あたりこゝに旅役者たびやくしやの笛ふえふき
に、伊勢いせの吉太郎きちたろうといふもの折わりふしは、子供こどもの一座ざによびて、二三度ふたさんども物
とらせたる事有あり、是より外ほかの茶屋ちや役者やくしや皆々みな分わかりあしく立寄たちよ事はことおもひも
よらずうら借屋住かじやすみの吉太郎きちたろうにたづね寄よれば丸裸まるはだかにて立出たちいお久ひさしや旦だん
那な、かかるはにふの小屋こゝろへのお立寄たちよかたじけ有ありといふ物ものじやと、俄たちにた

ろく暮して埒をわけぬ

四十九日の堪忍是からの皆我物

世には借錢ゆづる親もえてあましたる一人野秋があだまく
ちたいこ持律義みやこの島原へ流人

長者に二代なり、女郎買に三代おしと、京の利發ものが名言あり、洛中廣
きに歌仙分限とさゝれて、三十六人の中にも、ひだり座の第一、二文字屋
の何がしとて、親より家藏諸道具の外に、五百貫目書置せし時、連判の
をのく、是を改めて、跡取に相渡し候事實、正明白也、是を請取四十九日の
朝は旦那坊主よびて、夕食に精進あげて、箸をしたに置と宿をかけ出、島
原に行て丸屋の亭主かつてんか、おやぢが所務分見たか、と小判を
逆手にもつて、まきちらし此家内はんとやうと、よろこばせける、是より
心にまかせ太夫の石州をあげづめにして、いかか、脇の男に、ひぢ
りめんの戸帳おがませず、此女郎を秘佛の太夫と名高く、その頃の太鼓

られていづれもの手前迷惑千万といふ、今迄のお隙入御食のまいつた
 かといはれて、いかにもたべましたといへば、其通りに濟て、すき腹の乱
 酒、さかちの中にも生貝ちど喰つくして夜食までの待遠く、吸物の出る
 たび、もし温飩かともみれば、切かけ烏賊の、しかもかすかにこれらに腹も
 ふくれず、笛吹の吉太郎の氣をつくして立て歸る、一座の衆道の色に前
 後忘るゝ、醉心我を覺へず、是はさむひといへば、お着物の入たる風呂敷
 取てまいつて、大勢の中にて、是を明れば紺染の暖廉に丸のうちに、仁の
 字付たるを取出せば、此座興さめて、をのくみぬ顔するも、ちをおかし、
 随分氣づよき物ちがら、洒さめて、うき世の人を恥て、是より無用の色道
 とおもひ切て、家財しまひて其身ひとりの草庵、むかしの友にあふ事た
 へて、髭をのづからにのばし、手足終にあらはず渡世に江戸髻の賃びね
 りして一日暮しに難波の堀づめに身を隠し、大寺の櫻はちかきに五と
 せあまり春を夢とちし蝶の定紋も付ずもめんを淺黄にやつて世はか



まやく一の徳入といふ針立、此秘佛さまを預り、ちうやまもりて、後生大事に目付する、是戀に心ざし、かく情に望み、只妻子の爲何も身過と療治を捨て、一年壹貫貳百目の御合力に定め、我宿有ながら、年越の夜も内に寝ず、目に正月させて、こきみのよき首尾聞かから妻なし千鳥と、どびありく、引舟女郎の帶とき髪、のそこぬるもかまはず、木枕が見へずは、よき物有と明重箱を横にして、誰に遠慮もなく、足手をのべし、後のすけを呑まひものと、現のやうに、いひ寝入に、此おもがけ燈に移り、おらはに見へけるに、すへの女郎おがら、白むくの肌着に、首筋うるはしく、すこし中びくにこそあれ、薄皮にして、ちいさき口もと、此中でみればなり、大津などの天職より、見よ、毎夜十八手が物を、國土の費と無常を觀する所へ、頓て出前の禿、我身を人の物にして、いとげなく腰まですそのまくるゝもかまはず、酒にいたみて、朝た雨がふつて、四つ時迄ゐたいぞと、おぼへずいふもおろしき、こいつも、わけをしらぬさまにもみへず、只置もむ





ねんと、又次の間をみれば太鼓女郎ふたりまで、九手が所ひき草臥て三
味線の筒を枕に足もたしあふて、さんけばあしを立聞するに、かる藻と
いふ女郎、しかも好そふなるにそれにこしらへて置身も、自由に我まゝ
もならぬ事は、氏神稻荷さまをせいもんに入て、去年の九月の十四日に
肥後の衆と床へいつたまゝといふ、我等は年明て二三度も分の立客に
あふたと語る、扱もふびんや、此女郎どもを買捨にして置け、喰ぬ殺生つ
みにも成べし、けいせいの男めつらしがる事、よもや世間にしるまじ、又
臺所を見わたせば柳真那板取まゝにして、色めきたる下女ども、男まじり
にうちふしけれど、誰がこれらに目をやる人もなかり、是をおもふによ
し野の麓に花の盛をみずに暮し山崎の人郭公に耳ふさぐに同じ、爰も
そのごとく女房見あきて、かんどもおもはぬに見へたり、こんな所へ來
て、たゞ居るは、うかとした事ながら、つねく律義におぼしめして、大事
の御番を、おたのみあされしに、みじんもじだらくなる事にあらずと、か

ては、三十四五貫目つかひしにわるひ所を、請取あたら身軀此男が皆にかしたるやうに沙汰せられ、聲にも養子にも談合の相手なく、なんにも残らぬ身ひとつ、けふを暮しかねて、やうく長者町によるしき叔母の許へにじりこむを、ゆかりあれば見捨がたく、四五人ゆるくと世をわたる金銀とらせは是も又半年立ぬうちに、かの里へはこびける、兎角俗をはなれさせよと、わうじやうすくめに坊主になせども、奇を此道をやめず、此上は養ひころせと、座敷牢に押入置に、是も忍び出、氣色を見るばかりにかよへば、いかなる事もや仕出しけん、と賢き人に相談するに、をのづから、やめさする遠嶋あり、こなたへまかし給へと、島原の揚屋町の横手に、ちいさき借屋をかりて、二清に渡し家賃の外に、壹ヶ月の合力銀三十目何成とも勝手次第にくるひ給へといひ捨ける、爰にて名譽悪心かはりて、人におふも迷惑して、後に、はやり咄しのうけ賣して、女郎さまより物もらひて口惜からず暮しぬ

た隅すみに取とのき、小こ分ぶん別べつ有あげに眉まゆをひそめまる寢ねして隨すい分ぶんさむいめを堪た
 忍しのびて、夜あけ明あけを待まち兼かぬる時とき、大だい臣しん起おきあはせ給たまひ、徳とく入いがねすがたを見給たまひ、い
 つもそのごとくひとり寢ねするか、さいわいの手てあきがあるお、さりとい
 無む用のしんしやく、さても殘のこらぬたはけ者もの爰あで戀こひをせぬは風かぜ呂ろへ入いて
 あかをおとさぬに同おなじ、ひへ物もの御ご免めん、どのふところへ成なども入いと、お言葉ことば
 かゝりて後のち、ぶんざい相そう應おうの遊ゆう興けい是こゝ皆みなお影かげく、太たい鼓ぶ持もちほぞ、有あがたき世よ
 渡わたり又またもあらじと覺おぼへける、此こゝ大だい臣しん一いつ代だいの奢なかり行ぎやう年ねん七しち十じゆ四し迄まで腰こしの骨ほねのつ
 いく程ほどの色いろさはぎ其その子こなを又また中なか頃ころの野の秋あきにはつと出でて、見み事ことさ、さはい
 しすご、是こゝも智ち惠ゑすぎでやむるに、あらず、自し然ぜんとおもしろさやみて、
 七しち十じゆ九くの夏なつ頃ころより此こゝ道みちをとまりける、二に代だいどもに名なを流ながし三代さんだい目めの二に
 清せいといはれて、かほる大だい臣しんなるか、ほとちかよひ灯ちやう炷ちゆうの立たち消きして、次し第だい
 わろくやめにける、二に代だい目めに分ぶん散さんに極ごくりたる身み代だいありしが、しうどのゆ
 づり銀ぎん、貳に百ひゃく貫かん目めのひらき天てん秤びんにかけ出し、今いま迄まではつゝきぬ、二に清せい身みに當あて

ありぬ、大勢の付合見すまゝ、京屋のあるじに、やりてのくめが、何か大臣
さまへおそれながら御訴訟事と申せば、其時殿さまは、置づきんして書
院毛貫をもち、一步ほしき訴訟かといふ、いかにもそれに、にました御事
あり、いのこのおかちんの米と申も、さもしき事ながらと申せば、いやく
世間にする事は、したがい、して、何程入ぞ、此時いふてとらひではと、正
月の餅米迄さん用して、六石五斗と申せば、女郎屋には大分いのこをい
はふじやなと、不思議がましき顔つきして、紙入をなげ出す、小判の次手
に十夜の盛物代霜月のおさめの甲申待、わたくし小宿の居風呂の釜を
仕かへの御合力、何やかや、取あつめて春までの勤とも残らず御無心申、
そのうへに正月の事いまだ間のある義なれども、外に申方なければと、
さゝやけば、此男にげる分別がはつて、いかにも拙者請合と、たしかに宿
へ申わたせば、亭主是は珍重、さても見事なあそびされやう、おそらく十
月朔日に正月の極まりし女郎、新町廣しと申せども、此太夫さまの外に

偽うそもいひすこして契ちぎりの豕餅いのもち

ひそかに詠ながめ候人腰こしバリも銀かねに成金太夫がしかけいつ
れこゝろの外ほかとろくしれぬは命いのち

萬事まんじしやれて、女郎ぢやうらうぐるひの今はどおもしろき事はなし、香車きやうしやの久米くめが
十四五手づゝ先さきをみすかし、此大臣は九月の節句過せつくすぎより大年おほとしまでは、長
ひうちにさのみ物入ものいりのない時をかながへ、よい事をしてとり、正月かひ買かい、さ
しづめになる、にげ道に伊勢へ年籠としぶらり又親仁おやぢの代參だいさんすると、師走しはす廿日頃あつ又
いひ出して、太夫さまからはなむけに、貳百目程入はひ肌小袖はこそでをとつて置おきみ
やげに小判おはんしんせて四十末社まつしやの者どもには、すこし子細しさい有てやめぶん
あり、内證ないしやうき聞てから鳩はとの目一文いちもんのたよりにちやらぬ事、うちやつてをけど、
何事なまことぞ有そふに、おもひせ、女じよさい在なき女郎ぢやうらうに、帥中間すいなかまから讚さんを付さすはし
れた事ことろんな前まへかた成仕かけ、四も五もくひぬ事、十月の始はじめいのこに、こ
なたから、いやどいはせぬ男おとこ、きのふと暮くらしてつゐる冬ふゆのいじめの朔日つひたち不

勢供つれて乗物にのる事、いやじやといへば、さりどては、そのこんじやうで、よふもく太夫とのよれさんす、あさましや、ことによつて死ぬるもあるに、こなたに何事があつても勤めの指はきらせぬ程に身に疵つけずに、女郎がある物かてがらに淋しうさいやうあそませ、太夫から二疊敷のすまひ今まで幾たりかみた事、唐紙のもやうは立田川が目にしたつ物じや、仁介さまにたばこすい付て、ちと上へござりませと、直にいやる顔を見るやうかと、扱もむごい事をやりての久米かいひまする、わたくしも新屋の金太夫といはれしもの、すいた男から命かぢんの惜かろと、もたれかゝつて泣出せば大臣聞届て是のあちらこちらにせんぎ成ける、けふの口舌をしかけ、是非指をきらす心底にて來りしに、おもひよらぬ事をきくは、何の日じやぞ、我をたよりに語りかゝるこそ因果、果され爰は見捨がたしと、まんまと一はいくふて、數ならぬ拙者が居るぞ、けにくひ客をまさちらせとかしら大きに出て、我ひとりして万事

あらは、いふてござれ、この首水もたまらずやるの、こんな大臣のお宿に
の今時分じぶんから仕着物しきせものが仕廻しまよて有物あつものじやと、むしやうにのほされ、前後ぜんごか
まらず、一座いちざは柳やなぎにやつて立けるか、風のなひきにかゝるは大臣の心こころ、て
つきりと太夫たふさまへ難儀なんぎをもつてござる所ところあり、時にこなたから先まづに
いひ出しまへど、その段々だんだんをしへ置おきしに、案あんのごとく大臣だいじんむりをもつて、
きそふある顔かほつきの時とき、いみじくとふかふしかけて、けふ御出ごしゅを待かね
ましたすこし御内談ごないだんいたしたき事は、此ほど兩度りやうど扇屋あふぎやであひまする田
舎かの大臣だいじんが、此方こなたいやなほどのほりつめ指ゆびを切たらば、根引ねひきにして國くにへ
つれて歸かへると無分別むぶんべつにすゝめば、いづれも爰こゝは切り所きりところじや、女郎ぢやうらうの指ゆびは
盆正月ぼんげつ勤つとむる男おとこにさへ切きりもあり、いふても是これは小指こゆび一つに千兩せんりやうあまり入
用出いようしゅして借錢しゃくせんまで濟すまして、一生いっしやうの苦患くげんのかるゝ事ことじや、ことに、親おやかた
の爲ため是程ほどのこと又またいつの世よにか有あべし、是非せひにきれど、やり手ての久米くめが
薄うす及およわてかへと、氣きにいらぬ男おとこよつれられて、いらぬ國くにへ行ゆきて大

わんじん坊主住しが、烏賊つくりて、わけぎ鱈のかほり、ふだん鹽魚さらすといふ事なし、南となりは三途川のお姥さまの勸進にあるく男、ふりぬのこあまたこしらへ置一夜を六文づゝにて、貧家の嵐を凌ぐために借て、朝たはかたはしから、のぎてまゝりて目前にあの世をみせけるかゝる所にも住なれて其氣にちれるは惣じて人間のちらひぞかし、今は人置中間のつかひして、手かけ奉公人の着替をもつて供するも口惜からず、錢さへとればおろしたる胞までも捨に行、人の果こそあさまじきものはなし、中くいきて何か甲斐のちき事ながら、其身に成ていしなれぬものと見へたり、されどもむかし残りてさもしき心にて紙一枚ちよろまかすといふ事なく、ある夕暮にさかりをおしむ藤見かへりに今橋の限銀といふ大臣わづかの春雨にあひて、軒づたひして行に、彼男やふれ笠さして、我を見かけ、此傘を御用に立といふ、心ざしやさしく、其まゝかりて見れば、越後町京屋五十本の内と書付おかしく、其男の歸る

をつとめけるは是おれ大分だいぶんのおとまりあり、此男も北濱源きたはまみづもとといはれて、諸分しよわけちうろくてんにくゝり、あまりさきぐりを仕掛しかけに、又女郎はそれを、しよさにする帥すいこかしにあのされ、扱ももろき身体取あつめて貳百貫、やりての久米くめかおひ立ける、若い女郎に付たきものはふるきやり手あり、町家若代まちやわかよに家久いへひさ一き手代てだいあると同じ、此大臣にもよき手代あらば是ほどまでには成なるまじきを、出入いでりの者も皆惡所みなあくしよにして鶏めしをふるまはれて羽織はおりかり取とりに―て歸かへるも有、家請いへうけを頼たのみながら疊たゝみの無心むしんを申も有、喧せん嘩するひてん書を預あづけて金子拾兩無理きんすかりにするやら、よる所さはる所にて取ひしがれ、財寶ざいほうざらりと埒明うちあけてむかしの風俗ふうぞく四五年にかはりて今は小谷おだといへる、びくに寺でらのほどりに裏家住うらやすまひして、いかぢく硯箱すべりばがひとつあらばこそ、ちんがらりにかけ釜掛かまかけて汁じゆなりの飯めしを焚たき、有時は餅もちに日を暮くしかひ時の帯おびしめて、三月大こんも腹はらふくるゝたよりとおのづから常精進じやうしやうじんの身となれり、この北隣きたごなりには觀音くわんおんさまを負おふて、く

西鶴をきこやけ

卷之二

あたご下風の袖さむし

堺の島長花紅葉の遊かべのくづれより小判珍一めづら百に成ても

女郎のこしつき晝食なしの道中小家も八朔の鱈なます

京は山く近く、松の風もりよひて、冬空の氣色時雨まもあく、雪もれも
まろ過るほどふりぬ黒木うる聲もつねよりいせのしく、今から日の暮
る、事の夢じや寶ふねのうち出の小槌も何も持ぬものが、うつてい
かなく、茶屋ぐるひするほどの銀も出ぬ世の中、あふてならぬ物おれ
ばつかひ捨ぬうちよ、分別せよと身にこりたる人の異見も耳にいらす、
皆になして合點のゆく人、それいれそし、昔より女郎買のよいほどをし
らば、此躰迄の成果と、有時泉州堺の嶋長といへる大臣、はじめの野郎に
あそび、毎日にしのび御座舟にみねのこざらしを乗せて、ゑびす嶋の遊
興世の人のするほどの事、えつくして、いつの頃よりか都の嶋原にかよ

入口をのぞけば、東窓の反古張みさく奉書のかきぶみ、心を留めて見
るに、うたがひもさく、新屋の金太夫が書翰、さまもたれたる、ぶんが
ら、お定りの奥の手われら命のし、きさまよりかり物とかく事、誰に
ても嬉しがる行がたなり、何とやらねかしく、押かけてたづね入、内のや
うきを腰ぱりも皆太夫が筆なればいかかるゆかりぞとむかしをきけ
ば、なんの用捨もさく金太夫ゆへに、此仕合に成けると、かたりぬ、金太夫
に我等わけあつてあひけるに、此君か文ともかくさらし置はよしさし
と、文反古のこらず所望して金子三兩とらせて立かへりける、此大臣も
此男のごとくに追付あるべき心ざしなり、金太夫が文やら鬼の手形や
らしらぬうら借や成にと笑ひぬ

とて、廿四日にねもひ立、あたご參詣と、ひとへ二日の旅用意、小者に風呂敷づゝみ、其身もわらんずはけば、下女はつくゝ。此風俗を見て、あの鼻の高さにて何の願ひか有、天狗も旦那殿に恥ぬべし、又火の用心も財寶ある人こそ、この地藏をたのみてよけれ、留守あづかるどて、おく長持一つ自然の時は、女のはたらきにても、のくる身躰貧者無用の物まいりと、おもひながら主命なれば、機嫌よく門おくりして立別れぬ、此大臣むかしのかりそめの京のぼりにも、堺より六枚がたの夜駕籠、壹人七文に定まつて四十貳文出せば、中を飛してまだ夜ふかきに淀の小橋のつめなる、偽の仁兵衛が所まで、鳴原よりのむかひ灯挑を出させ、水車のごとくまいらせし事もと、うち詠て、それが門をバすこし足はやに編笠先下りにかづき、鳥羽の馬うしをよけるも、よほどせわにて、程なく東寺より千本通にわかれくるのは、堀越にあげ屋町のうらをゆくに、どふいふても都ほど有て、物日の出かけ姿、柏屋丸屋の二階に衣襲ひ、兎角あかさ

ひ、大坂屋の野風やふうが吹ふきたてられ次第しだいにくだり舟ふねのぼりつめの、女色じよしよくなんしよく男色
 此二色いふたいろに身みをなし、財寶さいほう皆みなになし、さすが名高なだかき大臣だいじんの、幽かすかなる身みと成なて、
 四季しき小紋おもんのかさね小袖こそでも大おほかはりして、千種ちぐさ色いろのもめんぬのこの、身みせ
 ぱにして、借屋かしや住居ずまいのあいに、やう／＼手代てだいどもがなさけ、上下じやうげ三人さんにんの
 命いのちをつなぐ上荷舟うはふねのかしちんを、壹いちヶ月げつに四十五文しじゅうごもんづつあてがひれて、
 是こゝにて酢すも味あじ噌そうも茶ちやも薪たきぎも万事ばんじの朝夕てうせきを瑠明らうめいける、あひれや世よにある
 時とき、悪所あくしよへつかひしたる、文飛脚ひきやくの通かよひにしるせしその、賃銀ちんぎんも壹月いちげつに
 百目ひゃくもくあまり出しけるに、生いきながらかやうに成果なりはつるの我われひとりひとりのやうに
 ねもわれて口惜くちがし、それも時世ときよおれば、此浦このうらにて引綱ひきあみの磯藻いそもまじりの小鯛こいわし
 一ひとかぞわすゝ、五ごもん六文むくもんをねざりて、けふはいはふ八朔はつさくなりと手づか
 ら鱈なますにして、腹はらふくるゝをたのしむは、住すめる甲斐かいなく、ねもへど、其身そのみにな
 つて、舌したもくひ切きりがたし、科極とがきはまりて、首くびねらるゝ者ものも、その日の朝飯あさめし箸しも
 つてくふひ、人の命いのちほどれしき物もののなし、此隱いんじや者ものも何祈なまひのるらん正五九月せいごくげつ

給ふとや、また地の衆の文は皆までもよみ給はず、小宿に買やり捨給ひ、
挽碓の敷紙に成りて、太夫さまのお名を、小麥の粉によごすもよし、
それと又今の京の大臣くらいばかりとつて、勝手にありませぬ、
勤めのお身きれば殿ふりの御物好やめに、してたとへ物いひあしく、
一座初心にござりませうとも、こんぢ御状まいる方が大臣あり、
惣じてすい
が女郎さまがたの役に立ぬもの、随分しやれたる男自慢の人、
京大坂堺にもあまたあれど、無分別につかひ捨揚屋の手前もあぢわろく、
まはつて通るは、その心がらのたはけ者、女郎くるひばかりにかたづけ、
すへかかふあそばれしを、また野良に戀をまたげ、あたら身軀をつぶし、
若盛
にあてがひ世帯うごくと生て居て、何かおもしろい事あると、
我を見て、かく當言をいふやうに、是天性なりと、身ふるひして立のきあの内
義がいふ所、ひとつも違ひ参し、橋本のわたし越て、松の尾にかゝり、まこ
どの道筋をあたごへまいれば、かゝるうき事も、さかざりし物を、
此里よ

がひとしほ目立物ぞかし、小歌聞へて撥の音、是の何ともあらず、今一度
 千兩切にしつかふせず、爰の氣色を見たしと、八文字屋のうらある、壁の
 こぼれより、のぞきぬれば、名もしらぬ女郎が、座敷のなれて、涼み所にこ
 しらへし置床に、枕もなく寢ころび、今時分女郎の手にはめづらしき本
 の小判を五兩づゝ、四所にあらず置きうれしそふにあがめて、しれてあ
 る算用を幾度も數よむこそおかしけれ、是の京の金やり時にあらず、九
 月廿日過に時づけ届の小判さては田舎の素ひ人なるべし、何にしても
 此里は、あれをやらひではあらず所と、おもふうちに、宿のかゝが、ひねり
 文に五兩斗持添わたくしの方へも、半九さまより、御書翰に預りました、
 御返事によろしく、御禮申てやらしやりませいやりてのまかせに金に
 かまはぬのむかしの事今の廿兩は上代の貳千兩にもかけあひますこ
 とに北國衆の文を國のひけらかし物に、人丸貫之の筆より、おのくさ
 まの書捨を、大事にかけ、紙のそんずるをうたてく、裏うちして巻物にし

金魚が狂言もふる一江戸櫻のかへり咲男子がひとつきるもの朝顔の實を取ば、有御前の戸も茶の木となり

うへ野の櫻かへり咲して折ふしの淋しきに、是の春の心して、見に行く人袖の寒風をいとはず何ぞといへば、人の由静なる、お江戸の時めきける黒門より池の端をわゆるむに、しんちう屋の市右衛門とてかくれもなき、金魚銀魚を賣る者あり、庭には生舟七八十もあらべて、溜水清く、浮藻をくれかゝるくいて、三つ尾はたらき詠めあり、中にも尺にあまりて鱗の照りたるを金子五兩、七兩に買求めてゆくを見て、又遠國にない事なり是なん大名の若子様の御ちぐさみに成そかし、なに事も見た事かくては、漸にもちりかたし兎角人の心も武藏野なれば、廣しと沙汰する所へ、田夫ある男の、ちいさき手玉のすくひ網に小桶を持添、此宿にきたりぬ、何ぞと見れば棒振虫、是金魚のゑびみなるか、一日仕事に取あつめてやうく、錢二十五文に賣て、又明日もつてまいるべしと下男どもに、け

そながらも見たくて、いはれざる景にまはり、身にこたへたる人の言葉
を合點して、都もおもしろからず、嵯峨にゆけば、はや夕暮になつて、人と
むる女の袖にたよれば、一夜は爰にさだめしに、筆屋といひて、廣座敷な
り、折ふしの焼松茸に酒さまゝもてあしける、女もふつゝかに見へず、
機嫌とりて、立ふるまひもどこやら、お町めきたる所有、しかも其女は年
まへあがるが、廊下走りやう、只者とはれもはれず、くどきよりてむかしを
語れば、申さぬ事か嶋原の座持女郎、土佐といへる流れなり、いづれうつ
り香、つねならず、物まいりの精進をうちやぶりて、もめん寢道具に佗な
がら、太夫にあふ心地して、又下向にもたはふれ、お初尾ののこりを有切
にとらせ、山崎よりの舟ちんあくてひろひわらぢの歩行路、中食なしに
かへりぬ是ほど、こりて此身にあつても、やまぬものは好色とあふ人ご
とにかたりし

人には棒振虫同前に思はれ

もひけぬ心根、皆々涙に袖口をひたし時雨もしれぬ空、おれはいざとな
たの侘すまひに行て萬をかたりながら酒を飲ちらばひとしほ慰にも
成ぬべし、今の内義は定めて吉州と、よい中といへば、此女郎故にこそ、か
くは奇りぬ、傾城も誠のある時あらはれて、四年あどより男子をまうけ、
と、さまかゝさまといふをたよりに、けふまではくらしけると、夢の如
く語るを、現のように聞て、谷中の入相頭に、くれ竹のさむつき、とまり雀
の命も、あしたをしらぬ糸さし町の、東のはづれにつきぬ、此うらにかす
か成佳ひ三人おがらはいり給は、中々腰のかけ所もあるまじ、それも
よし、何かつゝむべしと、案内してゆくによし垣に秋をすぎたる朝
顔の、すへ葉も枯くになりける、つるをさがし、七十あまりのは、その
の實をひとつゝ取て又來年の詠をしたひける、されば人間は露の命
ともいふに、此老人はと、顔がながめられて、はゝさま爰を通りますと有
跡の禮義をのべて、埋れ井のはた越るもあふなく、影ぼしのたばこの、引

いはくいひて歸る、又これを見れば、爰もかなしく、世をおくれる人有と
物あひれげに其者を見れば、是のく伊勢町の月夜の利左衛門といへ
る大臣、我家を立のき、何國に暮せしもしらざりしに、さりとては、見にく
いすがたには、ありぬ、いづれもむかし語りし友達中間に汝をしどふこ
と大方ならず、えらぬ事とて、それよりの年月、かくあさましく暮させし
事、是非なし、此後は我々請取、貧樂に世を渡らすべしといひけるに、ま
だ此身にありても過にし、せいやますして、女郎買の行すへ、かくおられる
からひかれ、さのみはづかしき事、おもわらぬ、いかか、各の御合力
はうけまじ、利左ほどの者なれども、其時にしたかひて、惡所の友のよし
みに、けふをおくるといはれしも、口惜、面々の志は千盃なり、久しぶりに
あふ事、又重て出合事もあるまじ、一盃の茶碗酒、しはしの樂みあるべし
と先立て出、茶屋に腰をかけて、これぎり、彼の廿五文をなげ出しぬ、冬
かも此錢は宿なる妻子のゆふべをいそぎ、鍋あらしめて待けるに、すこし



はへたる細繩ほそなはのしたゆく程ほどに、まどより親のおもかげを見て、とゞさまの錢もつて、もどらしやつたと、いふ聲こゑもふびんあり内義ないぎはむかしの目かしく、同道どうどうせし人々を見しより、お三人の中にも、伊豆屋吉兵衛様是へいらせ給ふまじのこる御兩人はくるしからずといふ、あるじをはじめ、をのくふしぎを立、いかにして、あればかりをどがめ給へるぞといへば、是非せひなきは勤めつとの身、あかたには只一度ただいかりなる枕物まくらものがたりせし事、いまもつて心にかゝりぬ、あるじにかへす事もよしなしと、玉たまある泪なみだをこぼしぬ、聞きに理りをせめていたはしく、亭主ていしゆもまことなるを満足まんぞくして、女郎ぢやうらうの身はそのはづのものなるに、是はやさしきことはりど、時に胸むねを晴はらし、是はわれらが客きやくありと、三人ともに内へまねき、先御茶まづごちやといふに、薪たきぎなく、釣佛棚つりほとけだなの戸かどびら、はづれて有けるを幸さいはひに菜刀ながたかにて打割間うちわりまをあはせけるもりしこし、さて御ごひそらの男子むねおとこはといへば、十四五色もつぎ集あつめたる、ふとんにまきて、裸身はだかの肩かたをすくめて嵐あらしをいとふ風情ふせいを見て、殊更ことさら

にあはれなり、さむいにははといへば、内義うちわらひて着物は捨て、あ
のどとく、かくと、無理ある口説といひもはてぬに、大溝へはまつたれば、
裸になされてさむい、着物がひわがつたらば、着たいと泣ける、あるじも
女も随分心づよかりしが、今は前後を覺へずなみだに成りぬ、いづれも
しバしの物もいれぬ、扱はあの子がひとつ着物かはりもなく、や、親
の身として子をかなしまざるのなかりしに、よくよく不自由なればこ
そ、かゝる憂めをみするなれ、何かたるべきも、かげきさき立をのゝか
へる時、三人ながら小話で持合せたる少金を取あつめて一步三十八、こ
まがね七十目ばかり立さまに天目に入れて、是どの理なしに、出せしが、亭
主もおくりて出でしが、さらバくと夜暮ふかき道を急ぎしに、又跡よ
り彼金銀を持って追かけ、是のどふしたしかた、神ぞと筋なき金をもら
ふべき子細ちしと人のことはりもきかずなげ捨て立歸りぬ、是非なく、
とつて戻り、それより二三日過て、色品かへて、内義の方へ、持せつかはし

敷より受取けるを、庄屋宿より聞出し、一年銀五枚に極めて白髪町觀音堂のほとりに借座敷して、どしかまへなるば、一人つけて不斷は路の戸をしめて表に貧ある塗師細工せし人に、折く心付して、此妾の横目をたのみ、外より男の出入はかたく吟味して京より見廻にくだられし親仁も飯はふるまひて夜は脇宿をとらせ、淋しなぐさみに飼ける、三毛も男猫を見付、是さへ余所へもらかしける、さりとは、りんきふかき、山のねきの大臣、所の物頭もすれば、すこしは小百姓のおもふ所をしのび、又は公用をひるいつとめて夕方より、四里ある所を早駕籠にて、毎夜新町、ひがしの門より西へ行きぬけかよひ、中く夜見世のともし火も目にくらく、明暮三とせあまり、身をはこびしを、露路口の塗師屋が此事人に語りて遠い所を通ひくる隙あらば、女郎ぐるひをせぬもおかしまかも新町筋を越て、手かけに大分の金銀をいれけるたはけもありと一節切の指南する長崎勘十郎といへる、あそび宿へ、大勢若き者集て此は奇し

けるに、はや其人は在郷へ立のき、明家となりぬ、色々せんさくすれども、其行方しれず、三人ともに是をなげき、わもへバ女郎ぐるひもまよひの種といひ合せてやめける、世は定めおし、いな事がさのりと成て其頃のうす雲若山一學、三人の女郎の大分そんといひねはりぬ

うさひ餅屋つらきは確ふみ

新町の夜見世しらすめ綿秋のたまりかぬ木半か身のうへ座敷踊に戀がまはる紋所はむかりをのこす

諸色も其道に入されバ、善惡のわかちをしらす、河州高安の山本ちかき里人に、親の代より木綿賣ける、銀子をためて、かためてみバ、一番牛の寝たほどゆづり渡しぬ、いかやうにつかへバとて、一代にはへる事あるまじ、しかも深入をせず、上町者の手かけぐるひ、三十日に米壹斗五升、六疊敷二文の屋ちんしてやる分にて、是よりはと浮世をたのしみける、或時京より西國に屋形奉公勤めて親元へ歸る、其時の人置大坂に来て、藏屋

に大笑わらひしてその金持ひやくしやうの百姓ひやくしやうめを何とぞ本色町へはめたし、我々はな
 ければこそ、おもしろからぬ茶屋、風呂屋、おもふやうにならぬ世の中、又
 ことしも、よき綿秋わたあきなれば、その庄屋しやうやが取こむ銀かねほしやいかなく、身に
 はつけじ木村屋きのむらやの小太夫せうたふを、せめて三十日てんじつ天神てんじんのやまとを付て買た
 といふ、此物もの好すきあしからずと、其座ざに八木屋やち霧山きりやまにあへる木半はくはんといへる
 大じんすゝみ出て、さりとは其男おとこは女郎ぢやうらうのゆたかあるたのしみしらす、
 長門ながとの萩はぎの鹽道しほみちといへる法師ほうしは、歌仙かせんを請出うけだして宿しゆくの花はなにちがめ、若衆わかしゅ
 は、松島半彌まつしまはんやが色いろざかりにあそびける、白子町しろこの播磨はりまは、太夫たふのせ山せやまを、我
 物ものにして、是こゝ一生しやうじやうの榮花えいゐ、又尼崎町あまがさきの鹽しほといへる大臣おほおみは、銀かねにて淵ふちを埋うめる
 がごとく、有程あるほどは捨すてて其後おのちはうきよの隙ひまとなつて佛ほとけもなき天満てんまんの堂島どうじま
 に身みをかくれ、をのづから淋さびしく鼓つづみうたひの拍子ひたしをねしへ、やうく、基か
 會くわいにけふを暮くらし、ひとつたのたのしみにせし、太夫たふの金吾きんごも此男こゝろに戀こゝろがあ
 まりて、出家しゆくわに成りぬ、むかしのつとめをねもへば、今格別いまかくべつに引かへて、是





手
之
屋

は殊勝なる、をさまりなり、惣じて女郎ほど義理を面にして情を心底に
ふくみ、是程れもしろき物はなきに、れしきはあたら銀にて、磯ぐるひ何
とぞ、その庄屋にすゝめて沖をねよがせといふ、ぬしや、あたまふつて、そ
れは何ほど申ても、うごくものでは、ござらぬと、物がたふ申せしが、物に
は時節のある物なり、其七月の末より揚屋の座敷踊をはじめ町よ
り人の嫁子も、しのびくに見物に行しに、彼妾ものも、是を見たしどの
願中く合點せざりき、しきりにことはり申、けふで仕舞の扇屋の大よ
せとや、是非にみせたまへといへば、此庄屋心にはそまざれども、たびく
の所望なれば、耳かしましく、西口の香具屋の新九郎といへる此ほど取
出の太鼓をたのみ、ぬしやのかまじりに、をのく引つれ見物に出し
に、其頃は先佐渡島屋に、太夫揃、たかま奥州あげまき、かつらぎ、あづま、む
らさき、吉田もふり袖の時、あたらし屋の金太夫、小女房でも太夫めき丹
波屋のこざつまがすゝりとりたも見よく、井筒只うつくしく、小琴がに

郎をたのみ、俄になづみ出し、是を女郎の買はじめ、此いきと、とくいらざるは無念と、手かけは其まゝ、暇出して、借屋は三十日切のれもひ出、釜の下
の塵も灰もないやうに仕廻て、毎日にさはぎて、いつの頃よりか、太夫の越前
に大飛して、霧山にあへる木半にも一座して遊興、是でこそと、たがひにいひ合せて、二年あまりにすつきりと、ないがとやうなり、世はさ
まゝに變るかき、其霧山は、講られずして、行衛しれず、越前は病死して、
此二人の太夫昔のように成て木半といふ大臣は、次第に見にくふ成て、
世渡り色くにかはりて後は茶碗やき出す高原といふ所に、猿廻しと
相住して其身はわたさねの油屋にかよひ、金からうすを踏て、足手のだ
るき身にも、扇屋ながつと口説をせし高咄し、いまは無用のいたりなり、
又河内の庄屋大臣は、持つたへたる、野山竹木まで賣て、たのが里住ひも
成がたく、一家ちりゝに立わかれ、在郷の道筋はわすれず、玉造のすへ
きる中道といふ橋のつめにて、すこしの餅屋をせしが、見世にかけたる

がりのはしりたるも、ひと子細有てよ、明石屋のもろこし、よし野住吉屋の瀬川が鼻のさきもわるうは高からず、堺屋の君川が、ゐるきもつねの女郎の賢きにまさり、又七が初瀬も大和の大臣がをぞらせ、廿四人の大夫十九人まで、ひとつあつにまり、此ほか天神かこい見せのこゑある女郎ならべて百三十二人皆むらさきのぼうし、そろふたりや手拍子腰つきに氣を取られ、けかへし、はねづま引足のうるいしく、中のこしかけには役者末者うはき大臣これれもしろき事、天じくにも有へきか、日のくれゆくを惜む折ふし、伏見屋のはしつばねに小勝之亟とて一文取の女郎が踊装束して人の後ろより來て大勢の中をおしわけ、入て彼庄屋がひだりの手を、何心もなくしめてそこを明て、中へ通し給へと、ひたくと身添ける、此男玉しゐなく、力にまかせ、あたりをつきのけ、此女郎をねどらせけるが、是ぞ戀のはしめとなつて、石だゝみのゆかたわすれず、我前まわる、たびくほめて、踊はつれば、手かけはさきへ歸し、太鼓の新九

西鶴をきみやけ

卷之三

れもはせずがた今は土人形つちじんぎやう

毎日の芝居好女まいにちしげゐるすまぎらひとは云すとし今見物いまみるものは小むらさき太夫お太夫ひとつの掛銭かけせんすき腹はらのかつぷー

御異見おいけん見たびく尻しりに聞きかせて、野郎やろうぐるひのやむ事なく、明暮あけくれ四條しやうがはら

にかよひけるに、道橋みちばしのさはくづれけるは、此大臣こゝおとぎのめしつれられ

血氣けつ榮もかん末社まつしや役者やくしや、あかけかくわたりぬるゆへなりと爰こゝうけたま

はりの菱屋あしや六左衛門むさゑもんがせんさく仕出しだしぬ今の都いまのみやこの奢男あせおとこ然しかも風俗ふうぞくすく

れて、見ぬ世まよの中將ちゆうしやう中古ちゆうこの三左當代さんざどうだいの四六しゆりくと是こゝをしらぬもあく、毎日まいにちの

道中だうちゆうなるを、石垣いしがきのれやまども飯喰あひくひさしてはしり出い、此面影こゝおむかげを見れば

水茶屋みづぢやの娘むすめとも天目てんもく手てからねとして我商賣わがしやうばいをわすれし、東山ひがしの櫻さくらも日

々々には見られぬじやが、たとへばあの男おとこいきた如來にょらいさまにもせよ、やう

もく眼めがつく事ことじや、追付目おいつめやみの地藏ぢざうへ七日なぬかまいりをするで

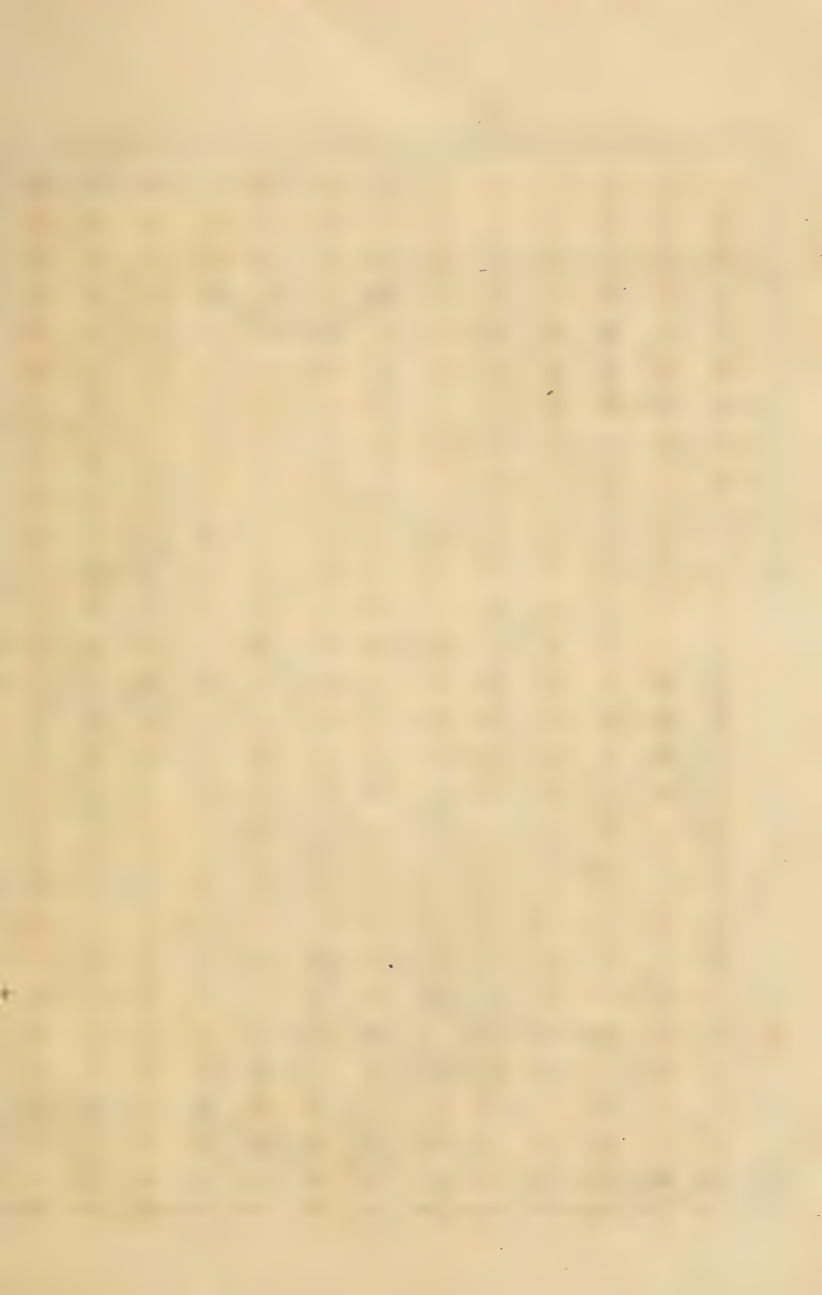
のふれんの紋もんに梅鉢うめさつをつけしは、越前えちぜんが定紋じやうもんさてもしやらくさし

わらふ、ちんの錢一文にもちらぬ大じん、あれよりは芝居見の出家衣に
 氣を取、札一枚讀こみても三文徳がある、むづかしい事ではなし笑ふて
 見せても物にちる事と、銘々の母親又は主人のしかるを聞か斷りぞか
 し、是らはよき所にすみちれて諸人の色ある男を見るさへ戀をふくみ
 ぬ、まして地女房は一幅帯の腰をぬかしける、たま／＼男と生れ出て是
 はそなはつてのくわほう也、殊更親は後家にて銀持で寺まいり好にて
 世界は我まゝといふ大臣也、人に借りずにあるにまかせて、此川原にね
 るて水の流るゝごとくよき物とらされければ、惣ての太夫本木戸の
 者、あまかへるの芝居成小見世物の猿までもれ顔を見えつてゑぼしを
 ぬぎぬ、此所を是程までしこなしけるは、一年に千兩とはつもられける、
 是違ひあるまじ、一日に金子百兩まきちらしても、誰かれどろく者なく
 れ伊勢さまへ十二疋あげたるやうな所、さのみ嬉しがる者もなし、此大
 じんさりとは女嫌ひつゝに嶋原のけしき遠目にも見ざりけりされど





も物には時節有野郎ぐるひの意見しつめ見れば、是非なくやめぶんの
誓紙を書バ、諸神の手前を恥て其後はしるをのぞきもせざりき、扱は年
が薬とおのくよろこびけるに、又女郎ぐるひに身をなし明暮今の唐
土に出かけて是をとめどはあかりし、人また無用と身のためを申せば
我等此里へかよひまじとの誓紙はいたさずと、わるかしこき事にりく
つをいへバ、後には誰とがめる人あくて心のまゝにさはぎて、此町もお
もしろからず名に聞し武藏野の色ふかき、こむらさきを見にくたりけ
るに、江戸にもきかぬ氣の男、三木とやらが根から引ぬきて其行衛一れ
さりき、今すこしおそく此よねを見ざる事の口惜、せめて其むらさきに、
面影のにたるもかき、はるくゝ爰にくだりし甲斐にとせんさくするに、
是ぞといふ女郎もあく見ぬ戀するといふはむかし、今の世にはあき事
あるに、人の物にありけるときけば殊あゆかしく夢にも其姿を見て京
の物語りにもと、人頼みしてたづねけるにさりとはしれさりけり、有時



め、かり着も人の情揚屋定めてもやうしけるうちに、つゝ請出されて扱
も無念くと男泣にして語る、戀は是なるべしとあはれさに扱其こむら
さきがゆく衛はといへば、さらば京の人に今の様子を見せんと立行かた
は、唐物町の横町に柵も目に立ぬ程のうちに、むかしの残りたる女の見へ
しが、あれが三浦の小むらさきとや、今は其名も替てお梅とよびける、人
の女房になつて何か戀のあるべし、やれ思ひきれ外にも戀はあるもの
と男を友として、物の見事に三野にかよひ、今の高尾薄雲に手をそろへ
て、髭の長兵衛が座敷を我物にして京より持參の三千兩いかなくと一
角も残らずつかひあげて、又彼男と相住してせめては女郎が踏だる土
を身過の種と、揚屋町の眞砂を金龍山のまつちにまかせて、今は又うす雲
高尾が姿をつくりて、土人形の水あそひ次第にさびしくあつて、大かた
は火を焼ぬ日も見へしが、是にも腹の用捨なくつれぶしのかはり加賀
つみもなく銀もさく世の人におそれもさく、外の事さく外ませせずよね

淺草の寺町の横筋をゆくに、内の見へすくよしすだれ住あれたる宿の
 棚に、こむらさき形屋と看板出して、土人形の細工する男を見れば、京に
 て立役勤めし嵐三郎四郎が白むくの上によれ紙子身をやつし藝に出
 しよりのなをにくからず、いかさま子細者めと立寄、御亭主此人形のこ
 むらさきならば、先遊女にしての帯がせまし殊に後のとりありまんさ
 ら人のおかためきたるといへば、いる氣ならば取て御座れ、一文に一つ
 づ、賣物を無理なる御吟味それは七十四匁に賣時のせんぎと笑ひけ
 る、何とやらゆかしくされば此女郎其ねだんに年の明迄買つゞけに、京
 よりくだりたる男といへば、扱はよい物は都までもしるゝ事か奇、我等
 も此女郎におもひをかけ此三とせあまりもこがれしに、勤め女の事な
 れば、狀文になげくもおろかぢれば、兎角金ためて只ひとつ買ふて年月
 の思ひを晴さんと此ほそきうちより毎日三文づゝかけ錢をして、二年
 あまりにやうく七十四匁になして、ひとへ二日のうちにたよりを求

ふに全盛ぜんせいの時なるかや、孔子こうしくさい人までも朝あしたに道みちをきいて夕ゆふへに通か
ひかれ、何なにの古文こぶんしんぼうされば人間にんげん死しぬるといふ道具どうぐねとし、是こゝに勝かつ
男おとこ達たちもなしすこしのうちも浮世うきよの隙ひまさへあらば、此こゝ美君びくんを詠なめまいら
せ長命丸ちやうめいぐわんといふ薬くすりなり、仙家せんかの不老不死ふらうふしの妙薬めうやく取とりにやるまでもあゝ、近ちか
道みちに是程みづかよい事をしらするや、扱さ最前さいぜんのかはつた事の咄はなしのす衛ゑはい
かに、されば世よに子こか親おやにもてあまし、逆とも悪所あくじよくるひの異見いけんきゝ給たまは
ねば勘當かんどうを切きとは、前代ぜんだいためしなき事こと其親わがやち仁殿にでんは、伊勢町いせまちの大盃おほさかづきといへ
る大しん、酒さけより乱みだれて狸ねこ々のぬき手切てきりて、足あしもとのよろつく掛物かぶをよ
ろこび、揚屋やうやの物好ものずきは和泉屋いづみや半四郎はんしやうか二階座敷にかいざしきよしと、山本長左衛門やまもとちやうざゑもんが
かゝへの小主水こもんどにふかくあいなれて、内藏うちざうのさびしくなる事こと此こゝ二とせ
あまりなり、しまた六十むそに過すて鬢付びんぶたしなみ、女郎ぢやうぢやうと打死うちじと極きまめて銀かねつ
かひけるを、其子そのこは二十八にじゅうはちにゐるまでつひに揚屋やうや疊たたみを踏ふみしこともな
く、七歳しちさいの時ときかき初はじめに絹きぬのふんぞし買かふて中橋なかつはしの姨あはよりおくり給たまはり

くるひの意氣知をかたりて、婿の明たるふたりが仕舞、いまだ三十より
 内にして一代の榮花、是からさきの老の入まへ何どかあるべし、此四六
 大臣京都の大分の跡、母にさへ見かざられて他人物になしけるとや
 子が親の勘當さかさま川をおよぐ

茶屋にきゝやうの紋女郎に男草履取あつかひは千五百兩手
 かけが本妻のりんき江戸に鯉のさしみ賣

替た事を聞きました、兎角宿に居がわるひ爰に出かけたればこそおかし
 けれ、揚屋町の入口の茶屋に桔梗屋といへるかたの女房は、分別のまん
 どて太夫八橋夕霧につきしやり手の開山成が、時節あれば我世をへて
 おかさまといはる事もたのしみなり、此内に腰かけあがらよね達の道
 中を見るに、いやとおもふはひとりもあし是を又うごきがとれぬとな
 づむ程成もなし、今の世の女郎心はしやれて位あし、むかしのちとせ唐
 崎は禿やりての外に沓とて鬢切したる男草履取をつれける、是をおも

りんきしていろくに迷惑がらせ、程なくさらせける扱もめつらしき
あちらこちらの世の中や、其大盃といふ大臣のねさまりはとたづねし
に、千五百兩を手の物にして角町のまん字屋こさつま買しか、跡先の思
案あしにいかなく金子壹兩も残さず、是程見事にすりきる事たぐひ
あし、今見れば麴町の六丁目の横町にあはれなる借店して、鯉のさしみ
をつくりて盛賣にまはりぬ、因果は皿のふちと人の笑ふもかまはず、色
里の文どもを包丁のつゝみ紙にして見せけるも、此身にもせいをやめ
ざる親仁いまだ心残は、三浦の花紫にあはてはつべき事の口惜、是非此
れもひ入一生のうちにあだにはあさじ我等は此無事あれば、まだ三十
年などはたどへ不養生をしても長生を覺有、悴子は追付女房を持と三
年五年の内に、命勝負見へすきたり、子の物は親の物なれば此跡を丸取
にして二たび花紫の願ひなり逆もの事に一目も早く男子目にたくま
しき煙をさすけ給はれと、無理にむすぶの神をいのるわうし、此諸願成

しを、今に其一筋にて婿を明^{あき}世^よわたりの事のま^{だい}大事^じにかけわすかある
請^{うけ}酒^{さけ}、今では江戸にならびなき酒^{さか}店^{だな}と成^なしは、此一^い子^こがはたらきなるに、
親^{おや}に大^{おほ}ふんつかひはてられ、内^{うち}證^{しょう}のつゝかぬ所^{ところ}をなげき、駒^{こま}込^{こめ}の旦^{だん}那^な寺^{てら}
念^{ねん}佛^{ぶつ}講^{かう}中^{ちゆう}をたのみ、男^{おとこ}子^こがいふ所^{ところ}ひとつとして道^{だう}理^りあり、世^よには不^ふ孝^{こう}の
子^こども親^{おや}の死^し一倍^{いぱい}といふ銀^{かね}かる事^{こと}は聞^きしが、親^{おや}の身^みとして子^こを追^お出^だし
一倍^{いぱい}といふ銀^{かね}を借^かり給^{たま}ふは、ためしあきしかた向^{むか}後^ご色^{いろ}町^{まち}やめ給^{たま}へと、さ
まゝの御^ご異^い見^{けん}きかずいかちく此^{こゝ}道^{みち}とまり難^{がた}し兩^{りやう}方^{かた}おぼしめて
の御^ごあつかひならバ、只今^{ただいま}金^{かね}子^こ千^{せん}五^ご百^{ひゃく}兩^{りやう}俵^{たわら}が手^て前^{まへ}よりもらふて給^{たま}はれ、
あの家^{いへ}をまかり出^で一生^{しやうしん}親^{しん}子^しふつうの手^て形^{がた}とのぞめバねがひの通^{とほ}りに
あつかひすまし小^{せう}判^{はん}わたくして親^{おや}仁^にを追^お出^だしけるこれらは廣^{ひろ}き世界^{せかい}に
又^{また}もあるまじきたはけなり、是^{こゝ}を^をおもふに大^{だい}傳^{でん}馬^ま町^{まち}の綿^{わた}棚^{たな}に、色^{いろ}すける
亭^{てい}主^{しゆ}ありしに然^{しか}も此^{こゝ}内^{うち}義^ぎ美^び女^{にょ}なるに、外^{そと}に又^{また}妾^{めかけ}をこしらへしを内^{うち}義^ぎ情^{じやう}
にて、男^{おとこ}のかよへるも氣^きつくしと我^{われ}宿^{しゆく}によび入^いられしに、後^{あと}には本^{ほん}妻^{さい}を

有銀七百貫目つかへばつかふ物かなと、内證しつた人あつて、我をねりける、毎日此里のよねを残らず買上げてから、十五女郎十八人やうく、貳百七十目、見世の女郎壹匁から二分まで九十七人、惣高合銀五百目にて一日買は一年中を百八十貫目にてしまはるゝ事なるに、此大臣の銀つもり一年に貳百貫目餘づゝは何としてつかひけるぞと、團扇屋權七といふ太鞍持が何の役にも立ぬ不思議、是に身をそむる帥ほどにもないやつかな、色里に銀の捨るは其算用とは各別の違ひあり、惣じての人の世帯に飯米よりは小使の入るに同じ、女郎くるひも揚錢よりは外の物入かすゝなり、靈地の佛前に石燈籠を立神前に水鉢を切居て名をしるし置は末くまでも残る世渡り、けいせいぐるひに金銀入ても名の残しやうなければ、壹万貫目つかへばとて人の知る事にはあらず、此仙人坊も世のせはしからぬ時を得て、奈良より忍び駕籠をつゞけて、女郎一度に十人斗りもつれて京に登る事、いくたびといふ限りもあく、世間

就じゆの時もあるへきか

算用して見れば一年貳百貫目つかひ

南都なんともろはくねろし美食びしよくはからし酢すの鱻ふか小野おの嶋しまはわか物に
産れうまくの具足ぐそくの着物きもの明神あきみも御存知ごぞんじの色参り

商賣しょうばいの見世みせつきよきは酒質しちをとりて、南都なんと東大寺とうたい門前もんぜんに住て、仙人坊せんじんぼうと
異名いみよひてかくれもあき大じん、我里われの木辻つじ鳴川なるがわにはまりて、世を夢ゆめよ
り夢ゆめに暮くらしいつ夜の明るもしらず、算用さんようあしにつかひけるに、此所こゝは女
郎ぢやうの高下かうげもあき十五ごじゆう夕ゆふに極め置しは、申せはかるひ事ながら、是にも奢あこ
ればはかのゆく物ぞかし、此男嶋原こゝも新町しんまちも見ずして、所あそびの五と
せあまり何か勘定かんじやうになる事もなく、宵よひに酒飲のみて夜更よて女郎ぢやうと同じ枕まくら
に寝て、はりあいもつめひらきも敵たてにうれしがらせる事もなく、銀に賣
る身なれば是非せひもなき勤つとめと、いづれの女郎ぢやうにもうとまれ、わかしから
ぬ遊興ゆふけうに土佛つちぶつの水あそび、いつとあき身をくづして高たか十五ごじゆう夕ゆふの女良ぢやうらに、

のまぬといふ事ならず、其時々ときにかけ徳利とくりをさげ一度に六文づゝが酒、
此女郎こいらう買かひに行を見し人そしりをやめて泪なみだをこぼさぬはなかりき、かく
月日を重かさねしうちに好ぬ戀種こひだねとまりて、産月うみちかづきしにいかにとして
も其用意よういもならず、さあ今ぞとしきりはくれども取あげ祖母ばばの約束やくそくも
なく、腰こしを抱だたり湯ゆわかゝたり、まんまどひとりして万事ばんじの瑁うちをあけて
見るに、初聲はつこゑのあげやうからかしこそふなる男子おとこをれば、夫婦ふうふよろこぶ
事かぎりなくすゑの頼みたのみをかけゝる、人の仕合しあはせは定めがたし此子一兩
年あとに生れ出ななば、抱守だまもりつきくをきれいに小袖こそでのにしきをひるか
へし、宮參みやまゐりなどいかめかしくあるべきを、今の身となる宿やどに産れて、あら
ためての産着うぶぎはわもひもよらず、肌かわには紙子かみこ切くゝなるを繼集つぎあめうへ
には神祭かみまつりにこしらへし子供細工こどもこぎの具足ぐそくをさせ、いまだ忌いみもあかぬによ
ろひの着きそめれかし、今は世上せじやうをはづる事もなく其子を肩車かたぐるまにのせて、
春日かすがの社やしろにまいりける、明神あきみかみもかれが全盛ぜんせいの時を御ごぞんじなればさぞ

にしれぬ大さはぎ一道中にも百兩にては宿りがたし、同一春日の里に
 も黒米の打込茶を呑病中の願ひに鱧のさしみを喰ふて死たいとねもふ
 心、又は大坂の勸進能にやどはれて、地謠の歸さまに鹽買ふて行など、こ
 んなこみちなる所を見ては一日もなか／＼暮さるゝ所どはねもはれ
 ず、奈良も又奈良によるべし、かゝる大臣もあれば何れいにしへの都の
 人心ぞかし、仙人坊次第に有程は皆にちして、財寶も残らずむかしの名
 残には、請出しててうあいせし小野嶋といふ女郎一人ならではめしつ
 かひの者もなく、其後は元興寺の東町に身を隠し、けふを暮する爲めと
 て灯心を引て、ほそき世を送りしに小野嶋も是を見捨ず、むかしの形を
 やめて繼ねびのたすき、に古風呂敷を前垂になせし下子の手業いつか
 らも成物ぞかし、琴三味線を引し指に碓の挽木もつゝてまはり、ざりと
 てはかなしき世わたり折ふしは煙を立ぬ日も有ける、是をすこゝもな
 げかず男をたいせつにして、其心をそむかず今に此男日に三度の酒を

西鶴をきこやけ

卷之四

江戸の小主水と京の唐土と

金龍山の仕出茶屋女郎たかひに預り男青木やの小藤にか

ゝる時人はしれぬ仕合煙のすゑのたばこ入

關東の奥に今でも米一石に付十八匁する所あり、そこにも朝夕おくり兼ての乞食も有、御江戸に住ても身の一代に小判といふ物手にもつた事のちい者有、又一日に五兩づゝ悪所つかひして命を六十五歳につもり、我から二十八代のことをかゝらずと御町を我内にして、親の日ばかり宿にもぞる人も有、無用の身代自慢算用ちがひになつて、追付摺切にならるゝ事うたかひなし、むかしと替り人皆せちかしこくなつて、今程銀のもうけにくひ事はなし、近き頃金龍山の茶屋に、一人五分づゝの奈良茶を仕出しけるに、うつは物のきれいさ色々調へ、さりどはすへゝの者の勝手のよき事となり、中々上かたにもかゝる自由はなかりき、まだ

くふびんにねぼしめすらんと顔見^{かほ}しる八百八禰^ね宜^ぎ、是はくくと手を
打^うもかまはず、れもわく女郎^{ぢやうらう}が胎内^{たいない}より出し若君^{わかぎみ}と、具足^{ぐそく}のくさずりを
あげてれのくくに指似^{しじ}を見せて男子^{むすぶ}をしらせて歸^{かへ}る、ちを又小野嶋^{おのじま}此
男^{おとこ}を見捨^{すて}ずして、請出^{まうだ}されし恩^{おん}の程^{ほど}をわすれざる名女^{なむすめ}、万人^{ばんにん}あはれみか
けて後は二人^{ふたり}ともに發心^{はつしん}して秋志野^{あきしの}の里^{さと}の片陰^{かたかげ}にすめり

あへり、追付歸らばせんさくなされ、すこし身のいたひ程つめくして
置給へといへば、其唐土荻野さまはわれらの差圖さしづにて合點がってんあはせます
太夫さまあり、今日も傳馬町の清様きよさまより、もろこしさまの文ふみをわれかた
へおとゞけなされまして、めづらしくさいしまいらせけるに、すこしの
うち大事だいじの殿のみやさまをあづかりまして、たんといとしくおもふにも、此程
あだばれあそばし是非せひに誓紙書せいしとて、まことらしくいぢられすこしは
こづらにくふ、そのかたさまへいひやるといへば、もんどは相果あひけると
つくり改名書かひなせうてまざくど見せ給ふを、あまり腹立はらだてさもあらばせめ
て三十五日はお精進しやうじんささるべしと、同じ床とこにて肌はだをゆるさねばいかひ
御詫ごわおかしそきたさま御あつかひのしよかんまいるまでは、いかぢく
帯おびどくことにあらず、いかにしても捨すてられぬ男年おとことしをかさねての御念頃ごねんころ
うらやましくおもふに候、さて又本町の井筒屋いづつばの二六さまにはや六七
度たびも御あいあそばし候よし、是は我等のふかふおもひし男おとこされば、其元

是よりは清水町のかくしよね、百で酒肴もてなしさま〜なるもおかし、又深川八まんの茶屋者は本所筑地よりの各別見よげに、京の祇園町のしかけ程ありて、鳥居の内は二人一步外、三人一步と極め置しも物がたし、江戸に女の子のすくなき所かとおもへば、行先〜に名所有三野ばむづかしき女郎ばかりかとおもへば、新町がしのかきのふれんの分は、銀では一匁錢でやれば百に定めける、是も女郎の意氣地は更にかゝる事なり、內衣も絹物してはし切の鼻紙、くちすばめてやうじ喰へたる風情すゑ〜にてもお町の仕出しは各別なり、有時揚屋町に行て髷の長兵衛がはゝゐりて、ひさしふりにて爰を見しにお内義又うつくしうなられた、亭主人の身の養生が大事と悪口の跡は大笑ひにちして、酒のむうちにこもんどさまが見へましたを幸ひに、何やかや取まさせての情ばなし、我等が男は上がたにて無事かゑ、成程〜そくさゐなるが所〜で戀をやめぬやつ、京では一文字屋の今もろこし、大坂では扇屋の萩野



にどうりうの内は首尾あしからぬやうにたのみまいらせ候、まことに
山川百里をへだて、も勤の身は肌にある癩子までしれて恥かしき物
ぞかし、京の事も爰に居あがらしるは蛇の道を上戸と、口添へ酒のつね
よりはうまし、兎角しやれたる物語り聞さへおもしろ、いづれ女
郎も勤にこしらへ物ながら折ふしはわすれぬ程の男もあれば、又たの
もしき事もあり何に付てもなじみがほんなり、我もすみ町の青木屋の
小藤に、春ふかくおもひ入て請出す談合もせしが、さる事あつてのびく
になりしうちに、小市といふ男にだしぬかれ、今一たび町のおかさ姿
を見たしとおもへど、行がたのしれぬ事よとなげきぬ、時にいつも正月
の道安といへる按摩取、いまだそれをおぞんじあきはおそ蒔なり、其戀
種のゆかりたづねて存たり、其君こひしく、柳原のそのそこにとしま屋
とかたる、其後余所ながら見に行けるに、今は世帯持とてむかしは手に
ふれざるを塩買ふて錢わたすなぞおかしかり、此亭主が身にして今の

たのしみふかゝるべし、自然しぜんあの男がいつぞ持もちあきてさる事あらば、其時は此方へ取たしと無理むりりうくはんを淺草の觀音くわんおんにかくれども、さら
に其まゐるしもなかりき、或人これを聞てさりとはたはけたる願ねがひい
のれざる太夫格子の望のぞみかり、ちらぬ時はちらぬやうに、散茶さんちやもしばら
くの慰なぐさみ異い見けんすれば、きかぬ氣の大じんちれども銀かねづまり程口惜たじき事
はなく、其後はしのびくくにゆきかよひ、むかしは中橋なかはしのかくれ笠かさとい
はれし諸分しよわけ去りなれども、いつもある物もののやうに遣つかひ捨すて、さし引殘らぬ
揚屋あや町も此躰ていにて通りかね、やうくこまが糸のいきほひ、行人を笑ひ
し本町ほんちやうがしのむるよねにかゝり、又其時の氣になつて俄雨はかあめのかへさに
は草履くすりを紙かみにつゝみて腰こしにさし足袋たびぬぎてふところに入て、柄えもりの
からかさかすもせめては君きみが情なさけちりと、土手どての闇くらかりを歸るに、揚屋の
男を三人につれて花菱はなびしの二つ提灯ちやうちん、さしかけかさに大袖おほそでの合羽あつばゆたか
に、うらやましくも行男をひかりにすかして見れば、親仁たやちつかはれし喜

の中にさりとはなさけあし、遊女ゆめじよは子のないものと聞き、何事も偽りの世やと其後は子の事をうたてく、同じ枕まくらをならべながら入はいらぬ事、もはや十一年何の事もせざりき、婦夫めうとといふたばかりに世にすむたのしみのひとつかけたり

年越としこしの伊勢いせ参りわらやの琴こと

玉たまのさかづき當座たうざに割わりうつくしき物金太夫五條ごじょうの市いちか物好ものずき
長崎ながさきの鹿しかの聲こゑよし野のはいきたはな

女郎ぢやうらう請出うけだすといふも、すこしのはりあひあり、ちかき頃ころ、京きやうの三木さんぎといへる男、嶋原しまはらにかよひての、もの好ずきに、一もん字屋じやうやの唐土たうどよりいと上林かみばやしの金太夫きんたうふにあひぬ、いやともあふともいはれぬ、ほどうつくしき者ものなり、二三座首ざしゆび尾びして後のち、乱酒みだれさけのうへにて、一步いっ歩ひとつ大事だいじそらに取出とりだし、女郎ぢやうらうにおくれば、是はと嬉うれしき顔かほつきにて、ひそかあいたゝきけるを何なにが都みやこのしやれもの、ちらりと見て、さも有まじき事なれど、此太夫こゝたうふのすたるほど、さ

平次といへる手代ありしが、我等氣に入ぬとて追出せしが仕合となつて、大夫にあふ程のせんせい男ぶりも今ぞかし、是非もなき世の中扱もいきては甲斐もなかり、此かなしさに此道のやまぬは大かたならぬ因果どとよくく得道して、もは今晩切とせいもん立しが明れば又身をつかみたつるやうにおもはれて、人目も恥ずかよひけるに、吉之亟といへる壹匁のよねも、いせんの太夫ぐるひよりはしみくとたがひに見すてがたきうちに、無事に年も明て禮奉公も一年つとめて、身は自由あれども久しき買かゝり、四十六七匁にさしつまりてとやかく物おもふを、爰はと取もつて不思議に残る寢覺提重を賣拂ひて、吉之丞が万事をしまはせけふよりはわたくしの女房どもと、手前にひつとり横山町のうら棚に、夫婦といふをたのしみに、紙のたばこ入をぬひならひて、かすかなる煙を立て夏は蚊屋なし冬は綿入あしに、月日をおくり年をかさ糸しうちに、三つ違ひと四人まで娘の子をまうけしは、是程あらぬ世帯

てつよく、いかもなさけふかくたまゝにあへる男も心を残さぬはなし、首尾見合せて、根引おせんとおもひし男、其數をしらず、人の物にして後、是をなげきて、嶋原かよひをとまるも有、又はさわぎうへて、此里おもしろからずと、色河原の野郎にのりかゆるもあり、よし野くるわを出し、後、京中の戀をかやませける、其後、此太夫を地女房にすがたをつくり、難波の梅の比、天王寺の花の晝谷町の藤のそゝがれに、御所かづきの内ふかく、随分身のふりやめて、男はおそろしき風情して、黒羽二重の紋なしの小袖に、竜門の帯も目に立ぬ仕出し、かれど、數千人の形自慢の女中もよし野がしのび出立にけをされて、いづれの細工人のかくはつくりけると、外を見る人はなかりき、さては世の中の人、目利はかしこし、纒五尺にたらぬ身を、小判でのべたる上作物を見わけ侍る、それより生國長崎へ舟路にてつれくだりしに、讃州泊の磯といふ所にて、夏の夜、月平砂にかゝやきて、童女も浪間よりあらはれ、出京のよし野さんといふ聲、虚

もしく見へける、それより四五日も過て、熊谷大ぶりなる金の盃と、さんごじゆの盃とかさねて、太夫にとらせければ、更によるこぶ氣色もなく、金盃は庭はく男にとらせ、玉のさかづきは双六盤の下に敷て、みじんにくだき捨ける、罪も欲もなき此心をかんど、是ばかりのおもひ入何の子細もかく請出しける、此大じんハ太夫の五人七人我物にしてすこしもいたまぬ身体あり、此まへ長崎の鹿といふ大臣ハ、さのみ手前よろしきにもあらずして此さきのよし野にあひなれ、そもく日いひかはして追付根引して、我本妻にせんとおもひ込し女郎の仕合あり、此男三條の唐人屋といふ兩替に銀三百貫目あづけ置都にてよき所と見立、家屋敷を求め、一生の身すき、是にてあるやうにと、おもひし銀子取かへし、吉野を千三百兩に請出し、萬事のつけ届をしまへば、三百貫目も残つて、七貫目有けるとなり、此内證にて請けるは、好色第一の男あり、されば此太夫はかつて遊女の風俗なくて、さのみ物いふにもあらず、よはくと見へ

空くうに聞きへし美形びけい、是こゝにて見ぬ人はおもひ合あを給たまへ、たとへ分限ぶんげんなればと
 て七厘釜しちりんくまにて、せんそくをわかーさし鯖さばを霜月しもつき比ひにくふ人の目からは
 たはけのやうにおもふべけれど、既すでに人間にんげんとうまれ、日本にっぽんまれなる女郎
 を、ていけにするより外ほかに、何樂なまだのしみ有あべし此大臣こゝののがれぬ人も、太夫
 の野風ののかせを請うけて、伏見ふしの里さとにしやれて住すける、よし野はむかー山の片陰かたかげ、栗
 田口たぐちのほとりの草屋くさや、すこし都みやこをはなれての住居すまひ、男おとこざかりに法躰ほうたいして、
 月つきにも花はなにもよし野のを詠なめ、あした夕べの樂たのしみしみに、太夫たふが手てづからの
 せんじ茶ちやをくませ、よろづに他たの人ひとをまさず、碁相手あいて、楊弓ようきうの友とも、暮くれには女
 鞠まじりも色いろあり、風待かぜまちつすゝみ床とこに名なの木きをかほらせば初雪はつゆきのあしたは歌うた
 に心をあし、世よにある、さやしやあそびをつくし、雨あめの折あふしはほとゝぎ
 すもかけかし、ほたるも數かず見る夜よのなぐさみ、又またある時は夫婦水菜みづななど
 こーらへて、寢酒ねざけの種たねとあす事ことひとしほ酔よもおもしろかるべし、ある年
 のくれに、五條ごじょうの市いちといふ大臣だいじん、左門さもんといふ女郎じやうらうを請うけて其花はなざかりより、





今にちぎりをかさね、随分世をたのしみ、じまんして、此よねをつれて、年籠の伊勢参り、何の信心にはあらず、えようばかりの旅出立、世間のいそがしきをりなるに、おそらく京都に我ひとりと粟田口を行に小家がちなる所にて、正月の事ども、やかましき廿九日の宿にゆたかなる琴の音、唐弓の絃音かとうたがはれ、笹戸をのぞけば、よし野がうつくしさ、むかしよりまされば、面影を見忘れていかなる公家の身をかくしては住給ふぞと東どさりの火繩して賣ものに問よれば、長崎の大じん、よし野がつれびきど、あらしをかたるに、五條の市も、我をおりて、此ゆるりとしたる世のくらし、我等はいまだせはしき所ありと、伊勢へまいらず粟田口よりかへりて、大晦日に、女のかぶきものを揃へて踊らせける、人の氣に移しこゝろもをかし

戀風は米のあがり、つばねにさがり有

見せにしのび、鶴籠三日の日和見たし、椀久わらひし人も揚屋

三味線もやめける、心を付て俄大臣の顔つきども見る程おかし、こんな客客にあふ女郎の身になるもうるさし、同じ北濱北濱ながら奥州身奥州身うけの大い、あづまを山本に根引根引せしなど、名の立けるも、女郎の出世出世あり、椀久椀久ちとを其頃頃はすこゝ愚愚なるを、お敵敵のふそくの顔かほつき見てしが、是は我物をつかひて、太鼓太鼓其外其外にもうれしかる物をやめける、今しやれぶんぶんに成て、太夫にあへる客の末社末社をもつれず、時の風俗風俗とて、もめんめんの仕立仕立さる物で、出かけぬる人あり、此氣此氣からは、神しんぞ、けいせいせいかふはづなし、下帯下帯のふるきにも遠慮遠慮なく、面々めんめんの女房女房て埒あちのあくことぞかし、女郎くるひといふは、男も衣裝いしやう好みして色つくるころ、其甲斐かひあれ、同じ米を突すにくふよふに思ひ、賣物うりものながら女郎もいやがる事いふまでもさし、女郎の若物わかものにゑりをかけけるさへ能目よねめからは、よほど氣づまりなり、さるほどに今時いまときの仕かけ、かなしき買手かいてともあまた見へたり、わづかの身体しんたいにて、親おやよりしにせの商あきなひひ又は職人しやくじんも其一家けいけ、弟子でしなどの大勢おほせを朝夕引まは

が中つもり大盡もかはる世や

朝はしれぬ世の中、善はいそげとむかし誰やらがいひけるが、ひとつも
 是にはづれず、めつた的の徳兵衛、ぼんの長兵衛なといふ、色里駕籠の者
 とも、浮世小路に、さりとては隙あり、牧方へ二匁五分取て、はかのゆく事
 にはあらず、つらく野に出で、唐さびの根ざしを見しに、今年は風のふ
 かぬとしかれ、米商ひ隙あり、大坂の色さはぎ、天職より十五まで買わ
 げ、陰子のはやるは、北濱の若い者のいきほひばかりあり、雲にしるが
 出て、雨のふりしくるあとは風を見定め、てんほに手をうち、おもひ入の
 米買一時あまりに立ついき、目ふるあひだに二匁あがれば、後はしれぬ
 ども利を胸算用にして、晝から驚籠のはやる事三百挺あまり、悪所への
 りこめば俄にもらひにありき、または不斷隙なる女郎の仕合と成、揚屋
 次第にやかましくいよ、雨の宮風の神をいのりけるか、其夜に入て、
 空はれて青雲しづかに月出れば、いづれもいひ合せたるやうに、小うた



して、寄合過ると算用を立て、米も加賀の大ひね或はりうまい又は赤米百五十入の小あぢ、一文菜よりうちにあたるを吟味して薪も、舟大工のこけらを徳と氣を付、鯨あぶらのひかりがよいと爪に火をともすやうにしまつしても、取ふき屋ねのざゝぬけするを、此四年も葺かへる事となりかぬる人の色道は分別の外ぞかし、茶屋くるひもせぬ筈の者が、男つくりて天神買ふかと、此三十目の銀は家うちおはたらきても、ゑいやつと、五日程にもふけ出す銀にて、女郎ぐるひのする事なり、つれそふ女房の夜着、蚊屋まで、質に置、二日拂ひの間を合せ、年中二つぶんづゝ、せんくりにかゝりて、さいはひのひまかれバ、此名月ひとつ出やうとすゝめと、先下地のが濟ましてからの事と、揚屋からさしすしられて、是非もなぐやめて、立歸りさまに思案して、ならふ事ならば、何とぞあはしてくだされ、此ひとつぶんの銀は、此廿七八日に心當がたしかにこさる、こなたにも銀戸棚が入ませうが木を吟味してひとつ拵へてをこそふといへバ、

わたくしのかたは錢箱で持が明ますと、餘所見して居て返答するも、聞
てなんと親仁殿をこも家の直がわがりましたの、こちらの町でも、此程二
貫目屋敷に賣ましたと語る、亭主うさづきて、こなたのお家にも何ほど
からしやりました、さのみ賣へぎもこさるまいといへば、外に借錢いな
し、こなたへは損はかけますまい、月見は我等のあふやうにと頼む、扱も
ふびんなる大臣や、われから首尾をたのむに、これから言葉をさけて、さ
りとしては無念なる男、かやうのわけにて女郎ぐるひ、何のおもしろき事
ぞと皆大笑ひすれば、此揚屋、古文めきたる顔つきしていふかいはぬか、只
今の大臣さまかた、何の子細もなく銀に氣骨をおらず、心よく此里へか
よはせらるゝ大臣は廣ひ大坂に、物が五人までは見へませぬ跡は火に
成事もかまはず、おそろしき口入に書付を出し、かたり半分のかり銀或
は手をよく呉服物を買がゝり、是を賣そんじて、愛許の付届をしたり、又
は切ののびが藥種を買請、其倉倉がら質におき、虎の子わたしには玄給

賣うするも、泉平せんへいが千之介ちのすけを請まねて、一文いちもんづゝが、酢醬油すせうあぶらの見みせつきも、女男にょおとこの
むかし残りのこりてあはれ世よや

へども、一度は蛇の口をのがれず、今程悪所宿の迷惑ある事はなし、是はよき客とおもへば、人の嫌ひ手をおつき、物にあらぬ事幾たりか、揚錢夜食、御所栞まで喰れぞん、むかしは女郎に戀のつめひらきばかり、談合せしに、近年は内證の事を聞せば、きのとくがりて紋日つとめてもらい、おがら、其わけの立までは、物おもひける、かりのちぎりなれども、男はあゝくおもはぬ事ながら、揚屋の不首尾がたてたさに、其客のしがを見出し、裏つぎのある肌着、竜門の羽織に木綿入るからは、何とも合點かゆきませぬと、女郎と宿屋とひとつに成世とはかりぬ、是をおもふお、それくゝの分限より、色も奢り過たるゆへなり、とかく本大臣のきれ目なり、昔日刀友が、妻川に、一度に衣装三十揃へてとらせ、布平が、小太夫に金の櫛箱やる事又出来まじき事ぞかし、其時は笑ひしが、どまり四十五貫目に下屋敷賣し銀を、すぐに役者に荷はせ、吉田十郎兵衛が所にて、バラりくゝつかひしも、玉市かきわだ染の小袖に、紅うらのすそをかゝげて、雑木の割

西鶴をきこやけ

卷之五

女郎がよいといふ野郎がよいと云

始末は宿での事かけ間藝づくし九軒に身の捨小舟世渡りは
ところてんの草石塔の施主じん

南江のいたり茶屋に遊んでつらく鉄眼建立の唐造り詠て、あの銀の
入目あれば、南西兩所の色遊び亭主も嬉しがる程に、さばかれけるに、無
用の後世の晝夜みせの有難きを知すやと、何心もなく酒呑て少一のう
ちのさびしさ銀壹枚の堪忍所と始末するうちに鏡鉢、鉦の音して火屋
のけふり立のぼるをみて分別かひり、何れかきとも隙なる子供をよび
て、遊べど、油太といへる大臣すゝみて、主と相談すれば、今日の私の物好
藝子さらりとやめて、京からの旅子各様を見しらぬを七八人取よせて、
さつと踊じまひにして、其跡はそば切次に御行水、採暮かたより夜見せ
でなければ、夜がわけぬと、野郎お影に世をわたりながら、無用の女色を

すゝめ身の上しらすめと大笑ひして、その京ども、のゐらず見る事なれ
 ば、一慰女郎なぐさみのごとくかる事のあらぬが氣のどくと、大臣のはづみ只あ
 そぶ太鼓たいこらか、吟味ぎんみするもおかし、時に亭主ていしゆが何れもをよび立たて、ひとりく
 見るまでもなく、好すきく、に瑠らるの明事あきがござると、内證ないしやうの納戸なんどの口をみせ
 けるに、よろづのはり紙有かみ、まづ今宮いまみやの十日ゑびす、日待山ひまちやまふしのお札ふだ、や
 み目の妙薬めうやく、はしら曆かみかみ、その次に地芝居ちしばる子どもの品しなさだめ、それより陰子かげこ
 の事を、うやうの宿々やぐさへ、それに付たる若わかひ者が書付かきつけをつかりし置てき、かゝ
 る折まふゝ物好ものすきに、よばすためとておがし、一花山藤いっけやまふじ之介のすけ、年十四、色白いろしろにし
 て、目付めつけよく、嘉太夫かたふぶしかたり申候一、岩瀧猪いわたきい三郎ざぶらう、年十六、踊上手おどりのじやうずをあげぶ
 しうたひ申候風義ふうぎ其まゝ、女のやうにやはらかに生れつき申候一、夢川ゆめがは
 大六、年十五、酒さかぶり幾いくたりさまのお相手あいてにも成申候、文作ぶんさくの三味線さんみせんよく
 ひき申候、旅子たびこのうちでは衣裝いしやうあつはれさせ申候、一松風琴まつかぜのじやう之亟のじやう、年十七
 影人かげひと影かげよくつかひ申候、此外口かへから水みづを吹出ふきだし壁かべに文字もんじ移うつし申候、品玉しやたま





鹽長次郎まさりに候、一深草勘九郎、年十七物いひ此已前の鈴木平八い
きうつしよ候何も藝はかく候へども床達者に候、一雪山松之介、年十九
野郎也、座に付たる所、木子に取違へる程に候、扱も才覺なる書付なり、い
つれも同じねだんかれば、中にもむらさき帽子が取徳じやといへば、ま
づいかさにかゝる男かゝる、あの方から十九と書付出せし者、三十九か、四
十で有べし、汝は廿一歳にして太鼓持親仁とひとつ蚊屋お寝たこゝろ
なるべし、縁の遠き娘の年かくす、二つか三つか、五つか、はたちすぎて
ふり袖きるを、我町をはなるゝまでは、足はやに人のおもわくをはしけ
るやさしきに、藝子年つゝむからは、十違ひなり、京は大坂にくだり、大坂
は江戸へ行て、生れ日のしれぬゆへぞかし、何の善悪の沙汰、鼻の高ひ子
ともを描へて、是ぞ天狗たのもし、突當次第の遊興と、十一人よびならべ
みたる所、何もひとつにみればおもしろし、野にさく菜種もわつさりと
花は皆にて二兩三分が物、さてもやすい事かを、過し秋の頃、南都に大臣

山が奇ければこそと、おのゝ物もらひながらそしりて、此奢おきり是はどひとりもおおろく人なし、まかも耳みみこそすりに、女郎町は金銀つかふ所に拵おしらへ置おきば、小判めづらしからず、此前まへ松本まつもとといふ大臣の、くしろにて玉たまの井いさまに、いまだなじみもないうちに、桃ももの節句せうごの祝儀しゆぎとて、何心もあふ金子百兩おくられるを我も人も見し事なり、此ほど世上せうじやうに金子の見へぬ折せふしなればこそ、一兩の小判も二度三度いたゞきけると客きやくあしらひの女房にようばう立ならびて是を笑わらひける、いづれ女郎にようらうぐるひの極る所は銀ながら、ひとつは又仕しかけも有物ぞかし、さのみ物もつかはぬ男にまはりておもしろがるに、かくまたバつとした事にて沙汰さたになるは、此大臣のさばきあしきに極たぎると、いづれもの太鼓たいこ付つき添ぞながら、行すへたのも一からず、案のごとく、三とせたゝぬに、國元くによとの首尾しゆびそこねて、手と身になつて、また大坂にのぼりて所もひろきに長堀ながほりの北きたがはに、我國わがくにかたの者借ものしやく錢せんの海うみをぬけふねに越こて、爰こゝのうら屋うらやをかりて、身すぎにどころてんの草くさ

のお供して、木辻町の女郎残さずよびて十六人、小判四兩で花やりしが、其所のさはぎはおかし、兎角やす物は錢うしなひ、是もおかしからずと、すこしも早く落よと、十一人立あらびて踊る最中に、ばらりと立ち、新町筋をひがしの門より鳴込て、今の世の銀持大臣、御氣に入たる女郎あれバ、勤め十年をめでたふ、親の内へ歸り給ふまで、お買あさるゝと、男をたてる太こもち九人前後取まはし、おさきへ、おてきより紋付の二つぢやうちん揚屋から人橋かけて盛砂せぬばかり、追付是へ御成と九軒の井筒屋にさゝめきて、るもくは阿波の鳴渡に身は捨舟といふ大臣、我國にて銀も瓦も同じ事、大ぶん持ながらつゐに揚屋の手にも渡さず、世間を見せぬ事を口惜く、年に三度づゝ銀すてにばかりのぼれば、何事も大たばに出て、末ぐまでもよろこばせと、先女郎へ長徳寺二百宿のかゝに金子十兩、庭につかはるゝ男女にも、小判の花をさかせ、是をいかめかしう、今の世の大臣とその鼻の高ひ事、大坂のまはりに、天狗の住る

後の小うた三味線かしましく、高塚ひとへの色里の事を忘れて、おにど
ぞ雑煮をくふて年を取たき願ひ、三とせあまり、不自由に暮し、三十七の
極月九日に空しくおちりぬ、哀やかたびらもきぬ、死出の旅籠からげの棺
桶、道頓堀の野にわくられてよその亡者の跡さして、やうく煙とはな
りぬ、今見れば竹林寺に山譽風雪と切付て、銀貳枚ばかりにて、出来そふ
なる石塔、施主は越後町まんどしるせり、いかなる女郎か立られける、心
ざしの程やさし、此入替に、思ひがけなき銀もらひ給ふべし

去れぬ物は勤め女の子の親目に見ぬ戀に皆になし

先は班女がこゝろ入やまぬかよひち取沙汰の男め死などの
御異見さる人に智恵あり

至りせんさくにして、素人の珍重がらぬ物、本手のこうたぞかし、番町に、
さる御方の隠し藝に入筋掛を忍び駒にて引せられしが、又もなき音曲
是を役者の九兵衛が御指南うけてまねびしに、それも作彌むかしに成

をほして、けふの日を暮しぬ、やうく是にたよりて、迷惑がる宿をせば
 めて、ないうちを喰つぶして無用の腹をふくらかし、しかもうらはよし
 原の揚屋町、鹿はかりの寄所、引うたひのあげも勤めとて晝前より夜中
 過まで、かいちと聲のつく程は、一日拾七夕にあたるほどわめきける、
 むかしはあれぐらいの女郎に笑ひかけらるゝもうたてかりしに、いま
 のめにかゝりて、二階座敷のすだれをまかせ、こいぬぶりして、女郎に髭
 ぬかせてのたのしみさりとはくうらやましく、我世ざかりに七夕の日
 のうちに六拾兩、露にうちしも、あの男が甘夕にたらぬけふのさばきも、
 けいせいぐるひにこゝろのかはる事なく、十五ぐるひをすれば、三代に
 もつきせぬ寶を太夫にかゝれば、おもひの外、ほかの行事をいまだいふ
 今合點して、何の役にも立ぬ事ぞかし、小家の窓の明くれ、是に心をうつ
 しけるが、後には渡世かちしく、夜毎に、蜘蛛ひの人形拵へて朝に賣て、此
 いと細き事にて、命をつまぎける、ひん程人の心をかゆる物はあし、其

むかゝの人、我身のつらさに、ひとしほれもひ出て、みへざる眼の泪の
づから手向ともなりぬべし、今はその撥をとも絶て琵琶の海も跡にな
して、日高に京入して三條の何がしとかやいふ人の宿かりて、官位の大
願其日がらを見合せけるうちに、都の大臣、よゝ野にあへる一興に、いざ
あゆめとすゝめられて、其人の引導にまかせ東じややら、北の方やら、む
ゝやうにゆけば西嶋の細道名残れしさはとうたつる、朱雀の野邊誰じ
や、上林のかほる、御茶は初むかしか、迎もの事に此目をあけてみせ給へ、
物としに罪をつくりて、丸やの七左衛門が座敷に入ておかみけある戀
づくしいやどもあふとも、いはせぬ情、江戸に替りて物やさしくたはふ
れのみだれ酒に城俊が手前にまいりいたむと見へし時、はんどやうと
いへる女郎見かねて、これをもすけられしを、どふもならぬほどうれし
くて、それからすぐに、ほれ出して、よくくぢればこそ蠟の吸物喉を通
らす、今宵の明て歸りを待兼、人をたのみてくどきかけ、やうくふしぎ

て花橘も袖の香も、さる物の日くく、にうとし、浮世をみぢかふいふ人、さ
 りとは無分別極樂に行きて精進齋くふて、物かたひ佛つきあひより、筋
 鯉のさしみに、夜を明して、落し咄の大笑ひ御機嫌取の城俊、めには見ね
 ども彼囀こまかしく分をもしる事かな、われら今かはゆがる太夫が久
 しく引込勤めざる子細をしつたが、成程なるほど此御腹に若君一人ね
 はしますといふ、誰がいらせたぞ弓矢八幡深川の助六が子に極めける
 どや、それは生れぬ先のむつき定め、此子が娘ならバ十露盤もつて、男な
 らバ反古とじの帳をもつて生るべし、扱は町屋の大臣かときけば、なん
 の事はござりませぬ雨替屋のこまかあるやつが子あり、ねまへさまも
 あひ諍なれば、すこしはね身にかゝりたる事ぞといふ、いづれも笑ひを
 もやうし其大臣奉加につかざるや、座中も耳にかゝる折ふし、いざ此坊
 主を勾當なせと大分はづませ給へば、是は夢かや宇津の山を越て、都
 の人にあふもうれしく旅の日數をかさね、けふは相坂の宮もわらやも

常つねの人とはかはりて、此こゝ落おちふれしを、かきしく、わたくしの衣い装さう諸しよ道だう具ぐの
花はな車ぐるまなるを代しろかし、ひそかにたよりを求め、官くわん位いをすゝめしに、ねもひも
よらぬ心こゝろつかひ、何なにとて請うかべき子こ細さいなしと、京きやうも俄まはかにむつかしく淀よど舟ふねに
飛とのり難な波なみの北きた濱はまにあがりて杖つゑさへもたぬ座ざ頭とうの坊ぼう、身みは薄うす衣まぬに露つゆ霜しも
置たて、秋あきのあはれを人もしるにや、藝げいは身みをたすけて糸いとによる戀こひの歌うた、三さん
味み線せんひく手てになびけとは、目めくら神かみの道みちびき給たまふか、いまはゆがまぬ心
から色いろ事ことは捨すてける

都みやこもさびし朝あさ腹はらの獻けん立だて

吉きち彌やが藤ふじ見み大おほぬれの浪なみ後おそ世せきらひあり宇う甚せんかやぶれ紙かみ子こ尺ぶ
八やちの隣となりのめいわく火ひをたかぬ庵あん室しつ有あ

身みに相あ應うの遊ゆう山さんは、天てんもどがめ給たまはずむかしより聞きつたへ見みれよびし
に宇う甚せんといへる大おほ臣じん、一いち生せうあらひ小こ袖そでを肌はだに付つさりしが、いまは破やぶれ紙かみ
子こに風かぜをひかず、紙かみ帳ちやうといへる大おほ臣じんさりどては後おそ生せう嫌きらひなりしが、戀こひよ

の首尾しゆびして、玄のびくにかよひけるほどに、合力かうりよくの小判包紙つのみかみも残らず、
 今は官位くわんゐの望のぞみも絶たつて東あづまに歸かへるもれよびなく、身の置所おきせまけれど、さ
 らに後悔ごうかいするにわらず、女郎にやうにあはれぬ身のうへをなげき、世に住すむから
 のつらさなり、兎角とかくは佛ほとけの國くにへと覺悟かくお極きはめてゆく水の、伏見ふしの里さとの暮くれに
 まよひ六のちまたの地藏ぢざうを過すぎ、豊後橋ぶつごおしの半なかわたりて最後さいおを爰こゝに極きはめ、か
 たみの扇あふぎに風かせは無常むじやうの夕ゆふざれ、はんじやうが床とこのれもはく、いつの世に
 かは忘れわすれ、水みづもあさけあらば、今いま投なる身をうづに沈しづめ、形かたちを二たび人に
 さらすと、足あしを揃そろへて飛入とびいる折ひふ、笹屋ささやの何がしわたり合あせ、しかもみ
 しれる法師ほふしなれば、是こゝはと引ひとめ、橋はしづめのわびしき茶屋ちやにつれて、是こゝ
 非ひにやらすを語かたせ聞きて、此人こゝも男泣おとして、命有いのちあゆへの戀こひなれば、暫しばく京きやう都と
 に身を隠かくし、人の氣きを取り、つとめ居ゐる、ふたつの望のぞみもかきふべしと、智ち
 恵ゑ自慢じまんの異見いけんして世上じやうは何なにのさたなく、かくまへける誰たれかこの事ことをつ
 げわたる、雁金屋かりがねやの利右衛門りゑもんなど、よしなきはんじやうにつたへければ、

けれ、塚口が、天わらじに身を隠れしも、太子のもく子孫嫌ふにはあらず、人のこゝろほゞさまゝの取置各別にかゝれる物のなし、役者の藤十郎が、内証をかまはず、銀十枚出して、大津の大鳥買て、つね香酒の吸物にする事も米かゝのさがみ屋大臣西の久保に身をかくれおがら、惠心の御作を賣て、すぐに太夫のちとせを買たも、殊勝あり、吉彌といふふり袖が野田藤見かへりに、福島ふくしまの里に、身をのかれ一人の許へ尋ねしに、佗すまひおれば、さしあつて、やるべき物もなしとて、小判五百兩、ほしき物をかへとて、花車道具に事をかゝねば、家ほどよき物のないたとへ、隠者なればとて、雨露にはぬれがだきに何とて、備利國といへる人は、宿も定めず暮しけるぞ、其頃は京都の歴々朝夕の友とすれば、東山智恩院の門前町に居ながら、谷峯見晴す所をかりて、樂々と勝手をつゞけ給ふに、鬼角とかく是もむつかしければ、毎日各々まはり番にして、銀貳匁分づゝたまはれ、是より外に望みなしといひける、うれはいかなる事と問ば、祇園

りをこさねばならずして、夫婦目かけ女まで、墨の衣とはなりぬ、京にて
も花崎法師の世のやかましとて、じゆうらくあたりへ引込けるも、女郎ぐ
るひに、たいくつするにはあらず、かしく立まいつて、色もやめ時しる
と見へたり、是ばかりのわざりなき物なり、中といふ過書町の太じん男
ざかりに世をのがれ、是ほど樂しみあるを、今までしらぬ、ざりとはれ
そき覺悟と揚弓の矢じりごまに、一年を三貫目にもりつめての世帯む
かしおもひ出して、何かねもしろあるべし、大屋敷賣ぬさきなれば、智惠
あるともれもふべし次郎といへる大臣の長町の下屋敷、不思議に残り
て、角内忠兵衛、髭の半右衛門など、ねもしろく咄しくれて、尺八の手を
よく、うき世を空ふく風のやうにみなしけるが、ねなじくの女の爲なる
さし櫛、ひぢりめんのふたをして、すこしきたるき野郎をまねき、色付の
柱にもたれて、ねもふ人にねもてをそむき、かんぱつたる聲にて、よし野
の山を、うたひしを、ゆきつき次第に、竹にのせたるこそ色もわりて聞よ



町の辨當べんとうやへあつらへ、それて壹匁三分、小者ちひ八分にさだめ、朝夕あさゆふの梳洗せんぢ
 ふ事もなく、是程埒らちの明あきたる事あしと、願ねがひの通とほりにして、草庵さうあんには小釜こかま
 ひとつ、素湯すゆわかして、かうせんより人をもてなす物はあかりき、有時とき森
 五郎ごろう、鏝つば三郎ざぶらうあどいへる者もの、早咲はやさきの花はなにのぼりて、大和橋やまとはしのほとりにゑる
 べの茶屋ちやゑにあそび、浴中よくちゆうには是沙汰さたの菱屋ひしやの吉まさりのすかたを取とよせ、
 挽ひかせてうたはせけれども、中ちゆう々々西島さいじまのわけぼのには似にもせず、朝あさどく
 起おきわかれて、手水てすずむすび捨すて壺つばうちをやうじに齒はをみがきながら、ふと思
 ひ出して、彼法師かのほうしが許もとにたづねしに、是はと朝戸あさと明あけて、難波なみのの事ども、京きやうの
 噂うわさとりませての物語ものがたり、四方山ももやまの松まつにひゞきて、高笑たかわらひ程ほどあく日影立ひかげたちのぼ
 れば、あるじ氣きを付つて、是にて朝あさめしを喰くといふ無用むようといへど、是非せひにと
 めける程ほどに、然しからば酒麩さかふ一種しゆといふあるじ硯すずりを取とり出し、せめて京きやうで成なと
 も食悦しょくえつさすべし、何成なんなりとも、さあ々々望のぞみ、獻立けんたてまづ亭主ていしゆが好すきにまかせて、
 汁じゆはよめ菜なたゞきて、雲雀ひばり、さて焼物やきものは勢田せいたうなぎの各別かくべつあるをくふて、

み給へ、さて子もち鮎あなの煮なびたし、是では川魚かわいそ過とたによつて鯛たいを皮かわ引びに
して、わしらいなしの鱈たらさてわすれた事こと、堀川ほりがわ牛房うぶふふと煮な、是こゝでよひか、何
ぞ引ひ着き見合みあ合あいと書か付づ客内證きやくないしやうのあたま數讀かずよみて、此こゝ六人むねんまへ、すこしもはや
くと、不ふ斷だんの茶屋ちやへ持もちてゆけと小者おもものにわたせと、聞きぬ顔かほして、火箸ひさしひだり
の手に持もちて香かうの圖づのやうなる物ものを書かき居ゐる、さては此こゝてつちもお薬師
さまへ、かはらけをかくるかといへば、聞きてはをりますれとも、つねく
屈とまげが持もちあかねば、二人の膳ぜんさへ、前まへくの銀かねもつてこひと申ました物が、
かやうの振廻ふるまひ申まてまいりましてから、ねんもかい事こと、いたゝます事ことでい
こざらぬとおのが且那やなをにらみつけていひける、此こゝ首尾しゆび大おほわらひして
まぎらかし、いざ我われくが宿やどへと誘まひきて、取とあへずの朝あめし四よつ過すに
かりぬ、彼かの法師ほうし美食びしよくの好みこのみ、酢すの鹽しほのと、舌したうちして、大坂おほさかで喰くたる鱈たらとはむ
しても焼やけても新あたららしさ違ちがふた物ものじやと、世よに有あり時ときを今いまもわすれざりと、
夢ゆめのやうなるこゝろざし、ざりとてはく萬事ばんじ捨す坊主ぼくしゅにはよしと、此こゝ腹はら

明治二十四年三月十五日印刷
明治二十四年三月十六日出版 (第四卷)

編輯兼發行人 吉田廣作

印刷人 松澤 玳三

發行所 三三 文房

東京市下谷區北稻荷町四十番地
東京市麴町區下六番町十七番地
東京市下谷區北稻荷町四十番地

目下印刷中ノ書目左ノ如シ

梔狩劔本地

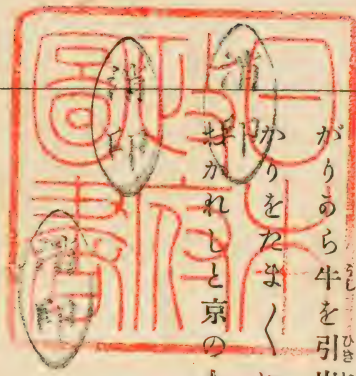
近松門左衛門作

島田耕一君校閱 平野猪之助君 杉山仲藏君 武昌吉君同纂

各國藥局方對照

此書ハ大日本、北米合衆國、英吉利、佛蘭西、獨逸、露西亞、和蘭、瑞西、澳地利、丁抹、瑞典、諾威、西班牙、白耳義、匈牙利、希臘、羅馬尼、芬蘭、合計十八ヶ國ノ新撰藥局方ニ記載アル三千七百有餘ノ藥品ヲ網羅シ每藥有効成分含有ノ多寡極量ノ差等及ヒ貯藏法等ヲ對照詳録シタルモノナリ藥品營業並藥品取扱規則第廿七條第廿八條ノ精神ヲ確守セントスルニハ必要ノ良書ナリ

のへるほどわらひけるこれもむかいは藤屋太夫職と、大坂に名高き朝
 妻つまに九枚まいつゝきの誓紙せいしも、火うち箱はこのほくちとや成ぬらんまことに闇くら
 がりあら牛うしを引出ひきだす如ごとくに、樂寢らくねをおこせど目を覺ささず、晝顔ひるかほの花はなのさ
 かりをたまたまくに見しとや、是もこれにて死んだ時は白帷子しろかたびらきせて、取
 掛かけかれしと京きやうの人がかたり侍る南無阿彌なむあみく



西鶴をきみやけ 終

注意ヲ乞

三三三
文
房編輯

東京百事便

定價九拾五錢
祝意を表する爲特
別割引金四十八錢
郵券代用不苦

弊房出版文學資料は大方諸君子の講讀日々多く第一巻發兌より未だ一月ならずして既に賣切相成候間抑祝意を表するの心を以て各賣捌にて相談致し東京百事便を特別大割引致候其東京百事便に東京の事大小とかく書き記せば東京在住の諸君及地方にて東京の情況を知られんと欲する諸君に必要なる良書なり

發行所

東京下谷區北稻荷町四十番地

三三三 文房

大賣捌

通三丁目 丸善 通一丁目 大倉孫兵衛
本郷元富士町 盛春堂 木挽町一丁目 萬字堂
吳服町 忠愛社 下谷西黒門町 昌平堂

東京府第三課長武昌吉君纂述 內務三等技師後藤新平君序

三版
増訂

明治二十二年 法律十號私解

定價金二拾五錢
全國無遞送料

本書ハ藥品營業並藥品取扱規則ノ各條ニ詳細ナル解釋ヲ附シ且本則ニ必要ナル附録ヲ加ヘタルモノニシテ藥業者ハ勿論醫家ニ於テモ必要ノ書ナリ
東京市牛込區横寺町六十八番地 發行者 武藏吉彰 日本橋通三丁目 丸善

廣告

文學資料第一卷

天鼓

近松門左衛門作

既發
郵稅共
金九錢

近松門左衛門信盛の肖像傳記を附載し猶ほ參考の爲めに謠本の天鼓をも掲載せり

文學資料第二卷

繪入 好色一代女

井原西鶴翁著
肖像小傳附載

既發
郵稅共
金十五錢

有名なる西鶴翁一代の傑作かれば其文意の妙味の實に喜ぶべく殊に元祿時代の繪様を其まゝ挿入せば當時の風俗を探るにも頗る適切なる珍書あり

文學資料第二卷

平家女護島

近松門左衛門作

既發
郵稅共
金九錢

近松門左衛門信盛肖像特別上等刷附載

安生堂産院の廣告

産院は左の人々に最も必要な所なり

○他人の家に同居するもの ○胎児の位置不良なるもの ○難産の癖あるもの

○妊娠中不快のもの ○自家にて分娩をすすま不便なる事情あるもの

産院に入る者は家族（親、姉妹、手離し難き小兒、下女等）又は頼み付けの産婆附

添ふも防なし

産院に夜具ふとん其他産時に用ゆる品物凡て備付あれば唯母子の衣類のみ持参

すべよるし

入院料は一日金七拾錢より金拾貳錢迄上中下の數等あり

産院に入らず自家に在る産婦より申込時は遠近貧富を問はず其依頼に應ず

毎月十名宛施設費妊婦を入院せしむ是目的たるや赤貧にして臨月に際し産婆を聘する

の資力なく爲めに不測の禍に蹈る者あるを救済せんと欲するにあり故に食

料其他少しも費用を要せず自費入院者の室と隔離したる所にて安樂に産をささしむ

此費用は安田銀行に預けある貴夫人諸君の寄附に係る慈善金を以て仕拂ふものな

書店 同通一丁目 大倉
 社書舖 同大傳馬町 大成館
 新宮涼園君 武昌吉君 柴田承桂君 同纂
 神田表神保町 三省堂
 日本橋吳服町 忠愛

獨逸醫學辭典

全一冊定價金壹圓四拾錢

此書ハ醫學上ニ關係アル獨逸語一萬四千言ヲ網羅シテ適譯ヲ下タシ管ニ名詞ノミナ
 ラス動詞、形容詞、副詞ヲモ收載シタル完全ノ好辭典ナリ
 東京發兌書林 馬喰町二丁目 島村利助 日本橋通三丁目 丸屋善七
 銀坐二丁目 中近堂
 山田寅次郎君 著

内地雜居之利害

定價拾八錢
 特別定價郵稅共金拾錢

此書の歐米人をして我内地に雜居せしむる事に附き其利害を詳論せられたる良書なれば愛國の諸君の一讀せらるべし

● 賣 捌

本郷元富士町二番地

下谷西黒門町一番地

盛 春 堂
 昌 平 堂

〔大至急〕 廣告

或人の依頼により和漢洋の古本大買入仕候間古本御拂の御方は遠近を問はず大至急御報知被下度候

下谷西黒門町一番地

昌 平 堂

れは入院者は少しも心配お及ばざるものなり
尚ほ寄附金増殖するに随ひ施費の定員を増加すべきに付大方の慈善家は多少を論ぜ
ず寄附あらんことを請ふ

東京市本所區横網町二丁目

十四番地(大川端)

安生堂産院長 村松志保子

大方ノ貴夫人紳士ハ目下陸續本院ノ旨趣ヲ賛成セラル、處ナルカ本月一日三條公爵
外七名ノ貴夫人ヨリ左記ノ書面ヲ添へテ寄附ヲ辱スルノ榮ヲ得タリ依テ特ニ印刷シ
テ本院賛成諸君ノ一覽ニ呈ス其他ノ寄附諸君ノ氏名ハ他日一覽ニ呈スルコアルヘシ
二月

拜啓陳者我等貴院設立之旨趣ヲ常ニ深ク賛美候ニ付客歲慈善舞踏會ヲ催フシ廣ク内
外紳士及婦人之同意ヲ求メ其賛助ト寄附トニヨリ致收得候金額之内ヨリ金壹百圓也
貴院諸費之内へ致寄附候條可然御取計有之度此段申進候也

明治二十二年二月一日

公爵 三條 治子 伯爵 西郷 清子 伯爵 大山 捨松

子爵 土方 龜子 伯爵 後藤 雪子 子爵 青木 エリサベツト

公爵 毛利 安子 三宮 八重 野

安生堂産院長 村松志保子殿

OKYO
南陽堂

COLUMBIA UNIVERSITY LIBRARIES



0048682802

